ウィメンズ フォーラム '90

日本の男たちはいま

―― 語ろう、男たちと ――

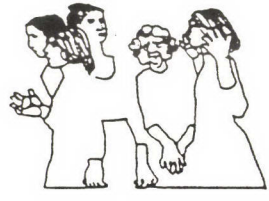
記 録 集

日本婦人問題懇話会

ウィメンズ フォーラム'90

日本の男たちはいま

── 語ろう、男たちと ──



日本婦人問題懇話会

フォーラム'90　目次

「日本の男たちはいま」
——女が変わって、男たちは変わったか——　駒野陽子……4

第一回　政治の場の男たち……6

女性議員が変える政治の潮流　湯川憲比古……7

男女逆転世界〝フェミニズムの帝国〟　村田基……13

◉討論のまとめ　女性の政治　佐藤禮子……19

第二回　マスコミの場の男たち　……22
ジェンダーの色濃いマスメディア内容を反省するために　諸橋泰樹……23
フェミニズムの網をかけ、世の中を見る　鹿嶋敬……43
◉討論のまとめ　現場に女性の視点を　松田敏子……49
参加者のアンケートから　……52
ウィメンズフォーラム開催のあゆみ　……53
あとがき　……55

（表紙カット「ISIS」より）

「日本の男たちはいま」

― 女が変わって、男たちは変わったか ―

日本婦人問題懇話会事務局長　駒野陽子

一九九〇年は、当会の創設者、山川菊栄さんの生誕百年、没後十年にあたります。そのイベントの準備で忙しく、私たちは恒例となっていたフォーラムをずっと開くことができませんでした。しかし、山川さんの生誕百年の今年こそ、私たち懇話会としてもハッスルしないわけにはまいりません。そこで、久しぶりにフォーラムを復活させました。

春の例会として第一回。山川菊栄生誕百年記念のシンポジウムが、お誕生日にあたる十一月三日に催されるので、その前の九、十月に二、三回目を、開催いたしました。

テーマは、「日本の男たち」。国連の婦人の十年が終わって、日本の女たちはかなり変わってきましたが、スローガンのように簡単に「女が変われば男も変わる」というわけにはいきません。女たちが急速に変わっただけに、男たちが一向に変わらないことに、私たちは苛立っておりました。

土井たか子さん（当会会員）の社会党委員長就任、国会や都議会に、多数の女性議員の誕生、働く女性のめざましい増加、特別役割意識からの脱却など、女性たちの変化はほんとうにめざましいものでした。その中で男性も変わらないはずはありません。ただ、そのテンポのゆるやかさが私たちにはじれったいのです。

私たちは男たちの変化の兆しと、変化を妨げている社会的状況を追求してみたい、と思い、あえて、いちばん男たちが変わりにくい分野を選びました。

日本の社会をがっちりとおさえ込んでいる企業論理の中で……、いちばんの女性の進出がおくれて

いた政治の世界の中で……、情報化社会といわれる現代、私たちの意識を左右する最強の力となったマスコミの中で……、何が男たちの変化を妨げているのか、三回のフォーラムで、かなりいろいろなことが見えてきました。まだまだ日本の社会は、男性中心の強固な構造で組み立てられていて、その中で働く男たちは、既成の社会通念に縛られているのです。そのことに疑問をもったら、その社会では生きられないほど、その束縛は強いのです。

でも、やはり、男たちの中にも、性別役割の社会通念を振り切って、新しい生き方を模索する身じろぎがあることを、私たちはこのフォーラムで確かめることができました。

昔、『青鞜』の女たちが、「新しい女」と呼ばれて、世間から指弾を浴びた時、彼女たちは自ら、「新しい女」であることを宣言して、世間に立ち向かいました。

「新しい男」も、男性社会では、自らの主張を明らかにすれば生きにくいのです。それを覚悟で、発言し行動する男性たちが現れ始めています。フォーラムは「女が求めるイイ男」の魅力をたくさん備えたパネリストのみなさんとお近づきになり、新しい男女共同社会実現へむけての戦略を、ともに語り合えたすてきな時間でした。この記録は、そのすてきな出会いと、話し合いを、読者のみなさんにおわけするために作られました。

第一回の「企業論理と男たち」の記録は、三月に開かれたので会報No.50に掲載しました。

この記録集をお読みになった方は、ぜひ、会報No.50を併せてお読み下さい。会員たちの「日本の男」に対する感想や意見をまとめたエッセイも多数載せてあります。

懇話会の出版物は、会報も、フォーラム記録集も、会員だけでなく、例会や、フォーラム参加者はじめ、広く一般の方々にお読みいただいております。この記録集もお読みになったら会員外の方でも、ぜひ事務局にご感想や、ご意見をお寄せください。

日本婦人問題懇話会「ジャパン・ウィメンズ・フォーラム」は、男女ほんとうに対等に力を合わせて創る「新しい社会」を望む、すべての人たちのものなのです。おわりに、パネリストのみなさま、参加者のみなさまのご協力に、心からお礼を申しあげます。

第1回フォーラム

政治の場の男たち

女性議員が変える政治の潮流　　湯川憲比古

男女逆転世界"フェミニズムの帝国"　村田　基

司会　中嶋里美

記録　駒野陽子

参加者　40名

9月8日（土）　PM1:30〜5:00　　東京都婦人情報センター

女性議員が変える政治の潮流

衆議院議員江田五月事務所事務局長　湯　川　憲比古

家庭科の男女共修問題がきっかけで…

どうも、こんにちは、湯川と申します。今ご紹介いただきましたように中嶋里美さんと知り合うきっかけになったのは、六年前に江田五月事務所の政策担当者として、ちょうど江田五月が衆議院の文教委員会に所属したばかりのときに、家庭科の男女共修問題が、女性差別撤廃条約との関係で浮上してきました。その点について江田五月が質問をしたいということで、その時私は、まったくそういう問題の所在も知らなくて、あわてて、谷内真理子さんという友人のところに電話をしまして、梶谷典子さんを紹介していただきまして、あわてて飛んで行って教えていただいて、ほとんど一夜漬けで質問の原稿を書きました。それで、確か、四月十一日だったと思いますが衆議院の文教委員会で質問したというのがきっかけです。それでまあ、やってみたらおもしろかったものですから、ずっとそのまま延々とやり続けまして、今年は文教委員会をはずれましたけれどもいよいよ家庭科の男女共修の実践段階、都道府県教育委員会でいかに実践・実行していくかという段階に入ったということなので、しつこくフォローしていこうと思っております。

地球市民をもとにした政治の組みかえと女性の政治参加の潮流

私は一九七九年から八三年まで、今東京七区で衆議院議員をしております、やはり社民連の菅直人という議員がお

りまして、彼とは学生時代からの友人でしたので、四年半ほど菅直人事務所の事務局長というのをつとめておりまして、いわば選挙参謀なのですが、当選前の頃からずっとやっておりまして、市民選挙のノウハウというもの、そういうパンフレットもあると思いますが、そのノウハウを一応まとめました。つまり、組織に加わらずとも一人ひとりの市民の人達の参加を得て、何とか選挙というものを組み立ててゆくことは出来ないかと。これは市川房枝さんの理想選挙がモデルでして、菅直人は市川房枝さんを全国区に再度かつぎ出した時の事務長をやっていたんです。市川房枝さんの理想選挙というのは、大変すぐれた方法論なんですけれども、ちょっと我々の目から見て厳し過ぎるなと、つまり、全く無名の新人候補が立候補して当選するという、方法論としては少し厳格すぎるのではないかという考えがありまして、それを市民選挙というふうに、――決して理想選挙の本質を曲げたとはおもっておりませんけれども――、つまり市川房枝さんのような知名度の高い人でなくても、あるいは長い実績のない人でもチャレンジできる方法はないかと模索してつくっていったという経緯があります。それらは一貫して、市民政治の潮流というものを大きな流れにして、日本の政治の変革の重要な柱にしていきたいというのが念願ですので、そういった中でずーっとやってきているわけです。要するに自立した個人としての市民とか、あるいは生活者、コミュニティの構成員としての市民、国家を超えた地球市民といいますか、そういう市民という概念をもとにした政治の組みかえをしていきたいと、そうしていくうちに、当然今日本のなかでは、市民活動というと実際上は、ほとんど八割以上女性が主体となって進めているわけで、それで、女性の人たちと一緒にやったり、お願いしたりしなければならないわけです。逆に言えばそういった中で女性の政治参加、社会進出というこれは当然、誰も否定できない大きな流れですが、女性の政治参加というものに出会う機会も多くありましたので、これはきわめて大きな流れであるという事は確認しております。

土井社会党を女性党にしたら…

特に、一九八六年、土井たか子さんが社会党の委員長になられまして、劇的に女性の政治参加が大きな潮流になって今日本の政治を大きく動かしているわけです。

土井さんの登場以後に、主に社会党が中心なんですけれども、特に（八九年の）参議院選挙と（九〇年の）衆議院選挙で新しい議員がたくさん生まれまして女性の議員も増えました。

では、永田町は変わったのかという事になりますと、本

当はもっと変わるべきなんですが、これからの努力も必要かなと思っております。

女性の政治参加ですが、基本的には大きな潮流でどんどん進むだろうと思っております。ただいくつかの工夫が必要で、自然にほっておいたら、自然でもかなり行きますけれども、それをさらに進めるためのしくみがいるかなと考えております。

一つは社会党ですよね、今、社会党は土井さんが委員長になりまして、かなりそういうしくみを作ろうと努力しておられます。なかなか、むずかしい問題もたくさんあって思うようにいってないということもあると思いますけれども、私は一つは日本の女性の政治参加を、劇的に進める大きな手立ては、日本社会党に多くの女性が参加されて、あえていえば、社会党を女性党にしてしまったらどうかという位の戦略をもって、社会党という政党を活用するという事を考えられたらいいんじゃないかと思います。

もちろん、政党と個人の問題は、非常にむずかしい問題がありまして、実際の議員で、社会党に参加して大変苦労されている人の例もたくさん聞いておりますけれども、孤立してたたかっていると確かにつぶれてしまうという事もあるかと思いますが、量的に拡大する事でそれはのりこえられる。

市民連合型ネットワークで女性議員を…

もう一つ、社会党だけではなくて、去年の参議院議員選挙で連合型候補というものが生まれまして、連合参議院の議員が十二人いらっしゃるんですよね、その中に、笹野貞子さん、京都の方ですが、あと徳島県から乾春美さんという方が新しく参議院議員になられまして、なかなかおもしろいキャラクターの人達なんです。この連合型というのがどのくらいこれからひろがってゆくのかまだ未知数のところがあるのですが、一応九〇年の四月の社会党の運動方針でも一人区・二人区の県会議員の選挙などで野党が候補者を立てられないような所は、無所属統一候補を立てようじゃないかという方針が提起されておりますし、二年後、九十二年の参議院選挙で一人区が現行定数割のままでは、二十六、一人区の選挙区があるんですが、その一人区でもやはり連合型の候補、無所属統一候補を立てていこうという可能性もありますので、そういうものも活用する事も考えられたらいいんじゃないかと思います。確かに連合型候補の場合は、原発問題等で、市民運動をやっている女性には、とっつきにくいという要素もあるんですが、そのへんはこれからの大きな課題ですけども、女性の政治参加という点では活用できるチャンネルの一つではないかと思います。

それからもう一つは、選挙制度によっては、市民連合みたいな物を作って、そういうネットワークでチャレンジするというチャンスもあると思います。特に自治体において、無所属というインディペンデントな形で、これも、あんまりポツンポツンと一人ひとりでやっているとなかなか大変ですのでチームワークでネットワークを作って、お互い一種の互助会的なやり方をしながらひろげていくという手もあると思います。

最近では、大きなポイントは、女性の首長、これが非常にインパクトを与える事になると思いますので、どこかで、女性の市長、区長、知事を実現する事に力を入れられるといいと思います。今、ちょうど、熱海で市長選挙をやっている最中で明日投票日ですが、この方は保守系の人ですが竹内さんという、元県会議員の女性の方が、今チャレンジされていますが、いい勝負になるのか。細かい事はわかりませんけれども。ついこの間は岐阜県で松野さんという女性の町長さんがやめられましたので福島県の柵倉町と、群馬県の水上町で二人だけ女性の町長さんがおられます。（その後、水上町で女性町長が敗れたので、一人だけになった。）アメリカなんかでは女性市長もいますし、今度知事に民主党からカリフォルニア州の知事選挙にダイアン・ファインスタインさんとかが挑戦されていますし、これは是非チャレンジするべき事だろうと思います。これは必ずどこかで近々生まれると思いますが重要な事だろうと思います。

男性議員ができないところから
イニシアティブをとって政策形成も…

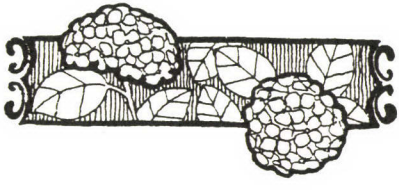
それで先ほど永田町がどう変わったかという事ですけども、もちろん変わってない事はないでしょうし、参議院の議場をテレビで見てみると、一目で変わったなというのがすぐわかるんですが、重要なポイントは、やはり政策的な実現といいますか、これは、私たちを含めて野党の課題なんですが、せっかく有権者の投票の結果、昨年与野党が、参議院で逆転したこと、それを思うようにまだ生かせてないんですね。せっかく参議院で、野党が逆転したんですから野党で統一した議員立法案を作れば、少なくともそれは参議院では通るんです。現に被爆者援護法という法案と育児休業法、これについては、衆議院は自民党が多数ですから残念ながら成立はしませんが、しかし参議院で可決されるというインパクトを与える事はできるわけです。これなんかも政府自民党が手をつけない課題を率先して考えていきますとかなり政府を動かす要素があります。例えば土地基本法なんかのように、結果的には、ちょっと甘い法律になって成立しましたが、野党がイニシアティブを取って

統一案を作って提出すると、それに対して、こういう問題に後ろ向きと思われるのも困るので、政府自民党としても自分たちで土地基本法を作ろうとするという事になるわけですよね。ですから女性の当面の大きな課題であると思われる雇用機会均等法ですが、すでに五年たちました。これは問題が相当残っておりますので、重要部分において改正をするとか、また育児休業法はもちろん成立させなければなりません。またパート労働法であるとか、あるいは夫婦別姓を取り上げる民法の改正も、やりようによっては可能性はあると思っております。男性議員ではちょっと手のつけないようなところ、そして当然のことをやる必要があると思います。実は議員立法というのは、けっこう大変な作業でして、資料を集め、勉強もして、専門家の意見も聞いてしかも法制局に大綱を示して、一条一条の条文を作ってもらってそれをチェックし、最低四党一会派でまとめてその統一案を作る。もし議員立法で提案した場合には、答弁者として大臣のように答弁をしなければなりません。当然、自民党から厳しい質問が飛ぶに決まっています。それに対して逐一答弁できるだけの力量を身につけないといけないし、とても大変な事なんですよね。それで、男性議員だったら思いつかないというような政策的な課題については、女性議員がイニシアティブをとって提起して男性議員を説得し、他の政党も説得し、場合によったら自民党の中の議員をも説得し、こういう法案を是非、日程にのせようじゃないかという形でイニシアティブを取っていく。私流の言葉でいえば、議員自身がロビイストになって、多数派を形成していくと。テーマによっては、いくらでも、超党派的なテーマはあるわけで、いま、私なんかも含めて検討中で、情報公開法をどうしようか、住宅基本法を何とかしようとか、あるいは環境アセスメント法なども提起されております。それからアメリカ全米障害者法ＡＤＡができましたが、あれのジャパンバージョンはどうだろうか、あるいは男女平等オンブズマン法みたいなものを作ったらどうか、また製造物責任法も検討したらどうかとかですね。いろんな動きが出てきておりますので、こういう場面に、イニシアティブを持って参加されると、女性の国会議員が生まれ、かつ参議院で与野党が逆転しているという事の成果を生かす道だと思います。これらは、端緒についたばかりのところなんで、そんなに表に立って見えておりませんけれども。さらにこれは、膨大なスタッフパワーが必要になりますので是非市民運動などで、長年テーマを追ってこられた方が女性の議員を――女性でなくてもいいんですが――スタッフパワーのアシストをしてあげるといいと思います。

とにかく、女性候補者を……

それから女性の政治参加に方法論、選挙ですが、活動を始める場合に、百万円とか二百万円のイニシアルコストがどうしてもかかります。いずれそれはカンパでまかなうとか、いろんな方法で出来たとしても、当初活動を開始するまでのイニシアルコストがないために活動が進まない、きっかけが作れないというケースが非常に多いので、市民選挙基金とでもいいますか、そういうファンドみたいなものを作って、それが一種の貸付けをやり、当選したら返すとか――利息を取る事はないかもしれませんが――そういったような事で活動しやすい互助会を政党、個人の枠を超えて作られたらいいんじゃないかと思います。

あと蛇足ですが、十二月に茨城県で県会議員の選挙がありまして、来年の春（九一年）四月に統一地方選挙があります。それこそ全国でものすごい数の選挙が行われるわけですけれども、その前哨戦として十一月（九〇年）に沖縄の知事戦があり、二月に青森の知事選挙があります。十二月（九〇年）の茨城での県会議員の選挙は、いま聞いておりますとだいたい昨日、おととい現在位で社会党が十一名ぐらいの公認、推薦の候補者を決めていて、今現職は四名しかいないんですが、連合型が今のところ一名という形で候補者が決まりつつあると聞いております。今のところ女性候補者が0であるという事なので、これはぜひ、社会党女性局あたりがふんばっていただいて強硬に申し出をして女性候補者を出すと、同時に四十四道府県会議員選挙、および自治体議員の選挙にですね、今、社会党がほとんど女性の政治参加の潮流と市民政治の潮流を受けておりますので、それを進めつつ、さらに横にも拡げるということでやればそうとう進むんではないかと思っております。とりあえず以上でございます。



男女逆転世界〝フェミニズムの帝国〟

作家　村田　基

「フェミニズムの帝国」を書いて

村田です。私がこういう場にきたのも、『フェミニズムの帝国』という小説を書いたことがきっかけだと思いますので、まず本の宣伝を兼ねて、どうしてそういう小説を書いたのかということを説明したいと思います。

これは男女の立場が逆転した未来社会を描いた小説なんですが、なぜ逆転したかといいますと、エイズがですね、かかると男だけが死ぬというふうに性質が変わってしまった。そのため男は女とセックスするのがこわいし、体を触れ合わすこともこわいという状況になりまして、どんどん立場が弱くなってすべてが逆転してしまったわけです。男性が家庭に入って、女性が外に働きに出る、それが当たり前になっている社会、そういう社会というのは当然セックスのしかたから政治のありかたまで全部変わってしまう。そういうものを克明に描くとかなりおもしろいんじゃないかと思って書いたわけなんです。けれども、本当のねらいというのは、性差別が誰の目にも見えるようにしようということでした。今の性差別の状況についてまだまだ一般の人は、男と女は生まれつき違うからこういうふうになっているんだと思っているようですが、いったんそういうふうに逆転した社会で、今度は男性が差別されているという状況を描けばですね、それを読んだ男性は性差別をまさに自分のこととして体験できるだろうと思うんですね。ですから、これはできるだけ一般の男の人も女の人も読んでおもも

しろいものにしようと思ったんですが、最終的には男の人に読んでもらって、多少は性差別ということについて考えてくれるといいなという、なかなか立派な志をもって書いたわけです。そして、本当はこれをベストセラーにして世の中を変えられればいいなというふうに思ったんですけれども、残念ながら力量不足でして、作品の完成度が低くて、文学賞の対象になるような完成度がなかったというのが一つありました。そして、もう一つ装丁を失敗して、ビアズレーという画家の、要するに世紀末の退廃と耽美の絵を表紙に使ってしまった。装丁の担当者が男の人だったもんですから、これを読んでけしからんと考えて、なにか『家畜人ヤプー』のような倒錯的な本にしてしまったんです。『フェミニズムの帝国』というタイトルは私が考えたもので、そのタイトルだけではいったいフェミニズムの側かアンチフェミニズムの側かはっきりわからないと思うんですけども、その絵を見るとこれは不健康な本だということになって、かなり誤解をされまして、本当のねらいが通じなかったという気がするんです。あんまり装丁にまどわされずに中を読んで評価していただきたいと思います。

男女が逆転した世界の美意識と政治

その本を書く上で、男女が逆転した世界はどうなるかというので一番むずかしかった問題が二つありまして、一つは美意識がどうなるかということです。つまり今、女性の身体が美しい、色が白くて肌がすべすべして、美しい絵になったり写真になったりするんですけれども、男性の体は美しくないということになってますね。こういう美意識っていうのはどうなるんだろうということがなかなかわからなかったんですけれど、最終的な結論は、やっぱりそれは当然変わって、女性が支配的な社会では男性の体の美しさがクローズアップされて、女性の体の美しさは誰も顧みない。だからここでは当然美意識も変わるという結論になったわけです。

もう一つわからなかったのは、政治はどうなっているだろうということなんですね。今の社会では男はひじょうに政治が好きです。ここ二、三年は別として、それまではほとんど政治といえば男のするものというイメージがありました。そうすると女性が支配している社会では、たぶん今よりも縮小した政治になっているだろうと考えられますが、単に縮小しているだけではまずいんで、もっと具体的に考えなきゃいけない。考えているうちに、いっそのこと政治というものはなくなってしまうことにしようと、要するにまったく政治のない社会というものを考えて、いかにももっ

ともらしく書いたわけですが、書いているうちに政治というものは本当になくてもいいんじゃないかという気がしてきました。この小説の二百年後の社会では、それほど大きな社会的変動がないんです。戦争とか、大きな価値観の対立がない。行政機構はあるんですけども、またそれをチェックする機構もあるんですけども、政治はなくても福祉などすべてがうまくいっている。かなり強引な設定ではあったんですけども、全然不可能ではないなあという気はしました。そういうものを書いたおかげで今の政治というものをかなり客観的に見られるようになったんではないかという気持ちもあるんで、そういった点から、ここ二、三年急に女性が進出してきて、男の政治、女の政治ということがいわれるようになっていますけども、とくに男の政治とはどういうものかについて、私なりに考えたことをちょっとお話したいと思います。

女の政治・男の政治

男と女でそんなに本質的に違いがあると思うわけではなく、今ある違いはほとんど性別役割分業の中から生まれてくるものだということを前提にしているわけですが、まず、今の女性の議員になられる方の発想というのは、最初に地域の問題、例えば生協活動とか、あるいは託児所がほしいとかいった問題から入って、行政に働きかけてもうまくいかないんで、じゃ自分たちの代表を出そうという、つまり生活からの発想という言葉がありますけれど、そういう具体的な目標から入っていく事が多いと思うんですね。ところが男の発想というのは全然逆になっていまして、いきなり天下国家を論じる事から始まるんですね。生活に身近な目標から政治に関心を持ちだす人なんてほとんどいないんじゃないかと思います。いきなり天下国家を論じるというのは、例えば自民党の議員とか高級官僚が論じるなら当然ですけども、本当に社会的地位もない屈折した若者とか、あるいは床屋政談ということばがありますけども、ごく普通の市井の人が国家のあり方について論じるというような特徴があるんです。なぜそんなふうになるかというと、要するに権力ですね。男というのはとにかく権力が好きでして、まあ好きだとは言えないと、反発する人もいるんですけども、どっちにしても権力にこだわるんですね。権力といえばとにかく国家権力が最高の権力ですから、どうしても国家に関心がいってしまう、その分、身近な事とかについては全くおろそかになってしまうという傾向があると思うんですね。ですから今の女性が進出するというのは、そういう意味では非常にいい事だと思うんです。一部で、あんまり女らしさを誇示しないほうがいい、政治をしていく

には男も女もないんだからそういう事は関係ないんじゃないかという人もいますけど、今まで男がやってきた政治というものがどういうものかを明らかにするためにもある程度、女というものを誇示しながら、とくに、ここ数年はやっていった方がいいんではないかという気がします。

それともう一つ男の政治の特徴なんですけれども、とにかく右と左がはっきりしているんです。例えば政治評論家という人がいますが、ああいう人もたいていは、政治的立場が必ずあるんですね。あの人は例えば中曽根さん寄りでかなりの右だとか、もしくは革新的で左だとか必ずあるんですけれども、こういう右と左の区別ってのは今はあんまり意味がなくなってきてると思うんです。ですからそういうものを変えていくためにも、今、女性の進出というのは意味があるんですね。例えば社会党の土井さんの路線なんですけれども、土井さん自身は党内の左派に一応基盤があると言われていますけれども、市民女性路線ってのは右か左かと言ったら、どちらとも言えないと思うんですね。ですから今まで男がやってきた政治、右から左までがっちりと色分けされてそれぞれが感情的に対立するという政治をなくすためにも女性の進出というのは非常に意味があると思います。では、なぜ、男が右と左に分かれるかということについては、私なりに考えた事があるんですが、もし時間があれば、後でお話したいと思います。

戦争を中心に動く政治

もう一つは、戦争です。政治と戦争というのが非常に密接に結びついているんです。これまでの常識というのは、要するに戦争というのは、政治の道具なんだと、つまり政治というものが目的を達成するための一つの手段に過ぎないというふうに言われてきたんです。それがまあいわば男の政治の常識だったんですが、私の感じでは本当は違うんじゃないか、むしろ政治というものは戦争を中心にして動いているんじゃないかと思うんです。例えば、二、三日前に南北朝鮮の首相会談がありました（九〇年九月五日）。ああいうニュースを聴いた時に真っ先に思うのは、まあいい事だなあということですね。なぜいい事かといいますと、これで戦争の危機がちょっと遠のいたなあと感じるからです。だから、すべてを戦争を中心に考えた方がいいんじゃないかと考えました。特に男は、さっきも言いましたように権力が好きです。権力の最高の形態が国家です。国家は他の団体とは何が違うのか。地方自治体とか会社とかあらゆる組織がありますけれども、国家とそれらの団体と何が本質的に違うかというと、戦争をする事です。もう一つ死刑をする事も入れて、両方合わせて殺人権と私はいうんですけれど、国家は人を殺す事が可能な団体であるというこ

とです。男は内心のドロドロした欲望とか憎悪とか破壊欲求を国家に託してそれで政治に関心を持つんではないかと、かなり男に対して悪意を持った見方かもしれないんですが、そういうふうに考えているわけです。特に男と女との政治の違いという事を考えると、どうしても戦争というものを考えざるを得ないと思います。

政治は予算ぶんどり合戦

もう一ついいますと、今の政治というのは、要するに予算をいかにぶんどるかという事で動いている面が多いと思います。これは今の自民党の政治がそうだからというふうにも考えるんですが、女性が進出したといっても参議院にかなり進出しても、衆議院はそれほどでもなかったですよね。だいたい衆議院というのは選挙民の利益とか業界の利益を代表して選ばれるという傾向が強いわけです。選挙民の利益のためになるのはどんな人間かといえば、官僚をうまく恫喝したり、なだめすかしたりして予算をぶんどってくる人間でなきゃいけないわけです。そうすると、そういう事にたけている人となると男だという事になるわけです。女の人では官僚をうまく動かしていく腕力は持っていないだろうと。だったら自民党の浜田幸一なんていう人がいますけれどもああいうタイプの政治家に投票して、予算をぶんどってきてもらおうという発想になると思うんです。こういうのは本当は好ましい事ではないんで、国会議員というのは地元民ではなくて国民の利益を代表する事になっていますが、現実は全く違うという状況は、とにかく変えていかなくてはいけないんですけども、男の政治では絶対変わらないわけですね。そういう意味でも、女性の立場から変えていく必要があると思うんですけれども、ただこれがまたネックになっていて、この現実があるゆえに、女性の進出が阻まれるという事もあるわけでして、これはどう解決していけばいいのか私にもちょっとわからないんです。

一応大ざっぱに、男の政治と女の政治の違いについて気づいた事を話しました。

子ども差別が性差別を生む

もう一つ最後に言いたいことは、男である私がなんで性差別とかの問題に関心を持ったかということです。自分自身の事を考えた時に、私は若い頃ノイローゼとか、「男らしさ」に自信が待てないとかいろいろ悩みがありまして、その原因を探っていったんです。主に心理学的な事から探っていったその結論は、まず子供差別というものがあるとい

う事だったんですね。今の社会は親が子供を一方的に叱ったり、しつけたり、勉強しなさいと言ったりしています。これはすでに権力的な上と下の関係です。そういう環境で育った男女が、いざ男と女の関係を対等に持とうと思った時に、真剣には考えることができないと思います。ですから性差別を自分の事として考えるには、「あなた、子供の頃はどうでしたか」と、「あなた弱い立場だったのに、例えば、親とか先生とかからひどいしうちを受けたんじゃないですか」と問いかけ、そういう事を自覚してもらった時に、本当に女性が今どういう立場に置かれているかという事を男性も自分の事として、感じる事ができるのではないかと思うんです。ですからこれから女性運動を進めていく上で一番大切なのは、去年、子供の権利条約というのが採択されましたけども、ああいった問題を含めていくことだと思います。男と女の関係もおかしいんだけども、子供と大人の関係もおかしいんだという事を合わせて考えてもらうようにしていけばそれは男にとっても自分の問題ですから理解する人が増えてくるんじゃないかと思うんです。特に最近、女子高生校門圧死事件とか教育の問題に関心が高まってますんで、特に女性運動をしておられる方は、子供の問題を同時に考えて、それによって男を巻き込んでいくという事を考えると非常にいいんじゃないかと思います。

アンケートより

☆女性が政治に参加し、男女同数位の割合で国の行政を考えることが自然であり、偏りのない考えが出てくるのではないかと私も皆さんの意見に同調します。力のある女性は多くいらっしゃることと思います。頑張って下さい。

☆選挙参謀の重要性がお話の中に出ましたが、今後そのようなテーマでフォローしていって下さい。

☆今日のフォーラムは必ずしもテーマの核心に迫ったとはいえなかったという感想です。今日のことを踏まえて次回に生かしてほしいと思います。

☆実践的な方法に関する意見をきけて、力づけられた。

☆男との貴重な語り合い、おもしろく拝聴させて頂きました。

☆なかなかおもしろかった。こういうところ（地域以外のところ）に初めてきて新鮮だった。

討論のまとめ

女性の政治

―目標と方法―

佐藤禮子

司会　日常の国会議員活動を通して、感じたことからひとこと。

A　女性に関連する政策に対して、女性の働きかけによって、男性にも理解が得られると思う。まず、女性議員がみんなはっきり自分たちの言葉で、現実を突き出し、奥深い生活実感のところで質問を投げかける、そのことで、男性の議員も官僚も、生活の場にいない弱みに気がつき、少しずつ変わっていけると思う。

司会　女性議員への野次はどう?

A　メチャクチャ、モラルもなにもない。

年配の人は戦争や自衛隊に対し少し違っていて、こわいものがある。

湯川　やっぱり男性の中に国連平和協力隊に自衛隊を出すべきだという層が厚くなっていると聞いた。

B　戦争の話をする男の人たちって、すごくイキイキしているみたい。国際的任務として当然とか。

村田　昔の戦争は男の力が圧倒的に必要だった。戦争がおこると自分の仕事が出来たって感じ。

男というのは、自分の体を粗末にするんですね。徹夜すると自慢したり、ボトル一本空けたとか。

要するに自分の体を粗末にするほど偉いというのが男の世界。

そういう人は当然、戦争に行っても死にやすい、そんなことあまり深刻に思わない。

C　最近の若い人たち、大人になりたがらないし、親になりたがらない。徴兵制がないこともあって、国家権力というのが見えなくなっていて、お金の力の方にリアリティを持っているように思う。

今の若い男性の変化をどう思うか?

村田　無意識のうちに自立を遅らせるような育て方をしてしまっている。世話をやかれる程、自分のことをしなくなり、対人関係も煩わしくなる。日本に徴兵制がないということで、世界の若者の感覚とは違うだろうとは思う。

D　女性がこれからどう政治に参加していったらよいか、ケタ違いにお金を使うかたい部分、既存の政治のあり方にどう入っていったらよいか。

湯川　そういうことを考える女性が増えて来ている。

前途洋々だが、政党はじめ、諸々のグループの中など全体的に女性層を厚くし、自治体の中にも女性議員を増やす。そこまでは、あまり抵抗はないが、根本的な権力そのもののマネージメントの中心を掌握するまでの転換が必要だ。現在、土井たか子さんは、男性軍がどっちかというと「それそれ、行け行け」というのに対して「ダメダメ」と止めちゃうほど力を持っている。当面の目標として外国にも前例があるのだから、市長とか区長、知事とか自治体のマネージメントを女性が担当するチャンスを戦略的に、ねらうのがいいのでは。

村田　男の経済活動には単に豊かになりたいからというのでなく女性の社会になれば無くなるであろう名誉欲、権力欲、注目をあびたい、命令する立場に立ちたいといった要素がある。

これ以上、今のような成長をめざす競争社会に対して、環境や資源の面からも批判する目的で、小説を書いている。

男と女に関係なく、企業というのは、自分の上役は選挙で選ぶようにするのがいいというのが私の考え。社会主義革命というのが、見込みなくなった今、これが唯一の革命的な目標だと思う。

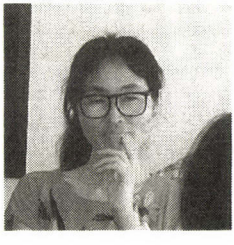
司会　今、女に選挙を支えていく力量が必要だ。意欲をパワーに変えていく時期に来ている。具体的取り組みの方法があったら―。

湯川　一番早い有効な方法は、社会党を女性党にしてしまう事。社会党の自己改革に参加することが結構速いのではないか。候補者選定システムに影響力を行使する。人材発掘して連合型とかも含め、互助ネットワークを作り、候補者擁立を是非やる。西独の社会民主党なんか女性候補者を四十パーセントと規則で定めてしまう。五十パーセントにしろとか。

E　一度選挙に負けるとバックアップする支援者がないと継続立候補出来ない。当選しても、組織を作り、意見も言うけどお金も出すというよう

湯川憲比古さん

村田　　基さん



（司会）
中嶋　里美さん

に議会活動をフォローしなければ。

F　市民が情報を正確に知る権利は重要だ。情報公開に関して聞きたい。

湯川　情報公開法を求める市民運動の運営委員をやっている。四党一会派の統一議員立法を提案し参議院だけでも成立させようとしている。

情報を国民が知る権利を確立するということは、日本の政治構造の大転換になる。

法律や条例を作っても、その権利を行使する主体としての市民運動を継続的にやることが必要。議員を通して権利を行使するとか情報公開のコツを勉強しチャレンジする。

一人で出来る行政改革は情報公開だ。

G　女性立候補者のための選挙参謀、事務局長の養成が大切。

H　男性を敵対視することなく、共鳴してくれる男性をどう育てるか、男性が支持できる女性の候補者なり参謀もプロデュースする。

村田　男は政治というと国家とか戦争を考える。福祉を男性が訴えても票にならないとか、もっと大きな政策を訴えろという気分がある。福祉を女性候補が訴えれば納得しやすく、男性の候補よりは好感度が大きい。

湯川　労働時間短縮で地域に男たちがもどって来る可能性がある。現在の教育状況がひどいことから、父親である人は教育に関心があるので、訴えやすいテーマだと思う。

I　政治をあまり深刻に考えないで、日常生活の中で楽しくやる雰囲気がほしいし、その中に男性もいると心強い。

司会　女性政治家をふやしたいということから、自分自身を実験台としてやっていくつもりだ。経験したことで、次の人たちに強いメッセージを送ることが出来るのではないかと。

この会合の司会者、中嶋里美さんは、91年4月21日の自治体選挙に立候補し、所沢市議会議員に当選されました。

第2回フォーラム

マスコミの場の男たち

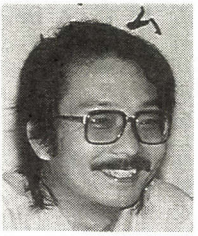
ジェンダーの色濃いマスメディア　諸　橋　泰　樹
内容を反省するために
フェミニズムの網をかけ、世の中を見る　鹿　嶋　　敬

司　会　松　田　敏　子
記　録　柴　田　博　美
参加者　60　名

10月6日（土）　PM1:30〜5:00　日本YWCA

ジェンダーの色濃いマスメディア内容を反省するために

―女男を分断する新聞の内容を中心に―



日本新聞協会研究所委嘱研究員　諸橋泰樹

喜ばしい男性たちの発言の増加

懇話会の例会やフォーラムに出るなどの直接的なかかわりは八〇年代に入ってからで、わりと新参者ではありますが、フェミニズムの研究団体のしにせであるこの日本婦人問題懇話会で、今回、お話をさせていただくのを光栄に思っています。

また鹿嶋さんのご活躍もかねがねうかがっておりまして、豊富なデータの満載されている『男と女　変わる力学』（岩波新書）は、ぼくにとっても大切なバイブルであり、ご本人とご一緒できることを楽しみにしていました。ぼくは日本新聞協会という社団法人の業界団体の研究所で、委嘱研究員として、人びとのマスメディアの接触行動の調査研究ですとか、新聞社の経営ですとかマスメディアの表現の自由などといった問題について研究をしてきたほか、大学でマスコミの研究、ジャーナリスト志望者の専門学校でマスメディアについての授業などを行っています。

一方、井上輝子さんら女性雑誌研究会と、主に女性雑誌の研究をマスコミ論や女性学の視点からやってきまして、その成果を『女性雑誌を解読する』（垣内出版）という本にまとめたりもしましたので、当初懇話会からお話をいただいた時には研究者としてということもさることながら、雑誌について話をしてほしいということだったようです。けれどもせっかく鹿嶋さんという日本経済新聞の婦人家庭部のデスクの立場の方とペアになれるのですから、できればぼくの興味、また皆さんも興味があると思われる新聞の世界にしぼってお話をうかがったりお話ししたりしようということになりました。

それにあたっては、ついさきごろ『セカンド・シフト』というアメリカの共働き家庭についての非常にいい本を朝日新聞社から翻訳、出版された、国学院大学の田中和子さんらと、何年間か国学院大学のゼミナールを前身とする女性と新聞メディア研究会で、日本の新聞の内容分析をやってきましたので、その結果をふまえて前半、ぼくがお話ししたいと思います。

ご承知の通り新聞の見出しは、相変わらず、女性を扱う時は「蜂谷真由美」みたいなのが出てくると「美人スパイ」だとかですね、男性は「蜂谷真一」とフルネームなのに対して 彼女の方は「真由美、真由美」と書かれてますとか、伊藤みどりさんですと「みどり」とか「みどりちゃん」とか、下の名前だけが書かれますね。あるいは「ブット女史」、「未亡人」「女性秘書」という言い方もおかしいのではないか。また男性にはあまり読まれていない、新聞における長い間の家庭面や婦人面の存在はおかしいのではないか、女性を新聞の中で特別視しているのではないかといったようなことが、近年活発化している女性とマスメディアについて考える研究や市民運動、人権ネットワークなどから指摘されつつありますよね。そこらへんのところを実際に男女雇用機会均等法の成立をはさんでの一九八五年と八六年の朝日、毎日、読売各紙の一ヵ月分を数量的に調べたデータを最近田中さんらとまとめましたので、今日はまずそのあたりについてお話ししていきたいと思います。

いま言った、女性とメディアと人権について、あるいは女性差別表現や性の商品化の問題について話しあったり研究したりする会の増加とともに、フェミニズムにかかわってやっと最近、男性の発言や男性の子育て・家事活動などが活発化するにともなって、本日の趣旨のような男が語る機会が増えていますよね。いよいよ、というか、やっと、という感じです。ですが、なぜか男についてあるいは男が語る集会は、どうしても女の人について語るようなところが、さもなければ男の〝ザンゲ大会〟に終始するようなところがあるようで、これを何とかしなければならないですね。それはなかなか難しいことで、男はまだ、自分を語ることばや、語るべき内容がないのかとすら思えるほどです。今日も、そこのところがうまくいきますかどうか。鹿嶋さんには男のデスクとして、また婦人面担当者として、男の本音あるいは男の世界みたいなところをなるべく語っていただき、ぼくの方はどれだけ新聞の中で男が巾をきかせているかというふうなことを出せれば、おなぐさみです。

新聞家庭面・婦人面成立の歴史的事情

まずみなさんがたが多分、興味を持っていらっしゃるであろう家庭面についてですね、家庭面がどういう歴史的事

情で成立してきたかを簡単にみてみましょう。

今は毎日新聞も朝日新聞も「婦人」面とは呼んでいませんで「家庭」面と呼んでいます。読売新聞は八五年の時点までは「婦人とくらし」面と呼んでいましたが、今は婦人部というセクションが担当して面建ての呼称は「家庭とくらし」面というふうに名乗っているようです。東京新聞は、「家庭・くらし」と書いてありますね。朝日新聞は家庭面を学芸部が担当していまして毎日新聞は生活家庭部が担当して家庭面を作っています。

鹿嶋さんのところの日本経済新聞は、夕刊に「婦人家庭」面というのが婦人家庭部セクションによってあります。新聞の面建て呼称の趨勢をみてみますと、地方紙も含めて多くが「婦人面」ではなく「生活面」とか「家庭面」とか呼ぶようになっている中で、日経の場合は自ら「確信犯」として「男も読む婦人面」ということで、当面「婦人」という言葉をおろすつもりはないとうかがったことがありますけれど、そこらへん、「婦人」という言葉になぜこだわるかということは、のちほど鹿嶋さんのお口からうかがえればと思っています。

それにしましても日本では古くから、一八九八年つまり明治三一年ですが、初めて家庭欄というのができています。これは大阪毎日新聞での「家庭の栞(しおり)」という欄でして、今は新聞は28ページとか32ページというように、ずっしりと重くなってきてさながら雑誌みたいな新聞スタイルで、十五段組みですが、昔は四ページですとか八ページ建てのページ数で、六段組みだったのですね。で、その六ページ目のごく小さなスペースをとったのが毎日新聞の「家庭の栞」です。その内容は衛生だとか、育児だとか、家庭、料理法とか、言ってみれば今の家庭面の記事とほとんど同じなのですが、そういう家庭に関する問題についての平易で実用を主とした内容を載せることを旨としました。「家庭の栞」と言って、「婦人の栞」とは言っていない点は、どうしてでしょうかね。つまり男が読んでも女が読んでも良かったんでしょうかね。岡満男さんの『この百年の女たち』（新潮選書）から引用させていただくと、「家庭教育」という記事では、「家庭教育とは一家の父たり母たり、また長上たるべきものが子弟を教育するの意味たり」と、必ずしも今のように家庭責任を母親だけに押しつけてはいません。但し、表向きには「婦人」とか「女性」とかうたっていませんでしたけど、一方で「小児を持てる母へ」といったようなマニュアル記事もあったのですから、明らかに女性を対象としていたとは言えると思います。

初めて「婦人」という名称のページが新聞で登場したのは一九一四年、大正三年に東京の読売新聞で「読売婦人附録」というのが八ページ建てのうち一ページまるまる使って作られたのが最初のようです。当時の読売新聞というの

はいまのように九〇〇万部も売ってギネスブックに載るような大部数ではありませんで、政論や大きな時事ネタを載せる大新聞に対して、朝日、毎日、読売新聞というのはいずれも政論新聞とは違う町ネタを集めた小新聞だったのですが、読売は日露戦争後の販売競争に遅れをとってまして当時あまり売れてなかったのですね。新しい購読者を獲得するにはどうしたらいいか、ということで、当時の読売の社主本野一郎の妻久子が愛国婦人会の会長であったことも利用して、女性という今までにない読者を開拓するべく、「婦人附録」という婦人面の〝元祖〟を設けたというのが歴史的な経過のようです。

ということで、女性の発見、あるいは新聞読者としての女性の発見が大正期に入ってやっとなされたと言っていいと思うのですが、もう一つは販売競争に遅れをとっていたことからの挽回策ということからもわかりますように、〝消費者としての女性の発見〟ないし〝開拓〟があったとも言えそうです。つまり教育がつき、新聞を読むことができ、本人が買ったかどうかはともかく購買力を持った女性が近代化とともに勃興して新聞社の売り上げをも左右するようになってきたと、そういうことがあるのではないかと思うのですが、これは逆に言うと歴史的に新聞の家庭面のあり方、婦人面のあり方みたいなものを規定するというか、家庭面が女性向けとして発生したということが現在の家庭面のありようを拘束しているというか、そういうことがあるのではないかと思います。

つまり女性の社会的な進出とか教育能力が高まったことによっての新聞を読む層が増えて「女性の発見」ということが一方では言えるかもしれませんが、他方では家庭面・婦人面というのは新聞社側から言わせますと消費者としての女性としか見てなかったという、そういうふしがないでもない。

山川菊栄さんは祖父の家の物置で古新聞を読みあさったり、知人の藤村操の自死を新聞で知ったりと、大変に早熟な方だったようですね。それで『女二代の記』（平凡社）の中で興味深いことを言っていまして、日露戦争が近づいたころ、女学校で、自分は新聞を読んでいると教師に言いますとですね、教師が「世にも険しく渋い顔をして黙ってしまった」というんですね。なぜかと言うと、だいたい「良家」というのは、娘には新聞も小説も読ませてはいけなかった、それが誇りだったからなんですね。

考えてみますと、新聞というメディアは、ほんとうに男のメディアですね、男が作る男のためのメディア。朝の通勤電車は、女性乗客が少ないということもありますが、みなみごとに日経とスポーツ紙です。さもなければ、特に月曜日がそうですけれど男たちは『週刊少年ジャンプ』か『ビッグコミックスピリッツ』でしょう。今度、女性のた

めの夕刊紙『レディコング』が出るそうですけれどね。成功しますかどうか。つまり〝経済〟と〝闘争〟、そして〝マンガ〟は男の専売特許なのです。

戦後の家庭面と、〝女性向け〟であることの葛藤

さて、戦時中は用紙統制で新聞が減ページとなり、〝面〟としての婦人面はなくなります。タブロイド版で裏と表のペラ一枚しかない新聞でした。戦後、一九五一年になってから用紙統制が撤廃されまして、やっと紙が自由に使えるようになって四ページ建てになり、やがて家庭面が復活されるようになります。真っ先に復活したのが読売の「婦人」欄で、一九五一年の九月、数日して毎日の「家庭」、一〇月に入って夕刊が復活すると同時に朝日が夕刊で「家庭」を、それぞれ始めます。それから朝日に「ひととき」欄、毎日にのちの「女の気持ち」となる「女性の広場」欄、読売では「赤でんわ」の前身である「女性の声」欄ができたりなど女性の投書も活発化して、家庭面そのものが大変活性化してきます。一九五二年一〇月二五日の毎日朝刊の家庭面をみてみますと、「プラスチックの眼鏡」「お正月の晴れ着」「婦人雑誌評」「広東料理三種」「お茶ぼうしの作り方」といった今の家庭面よりもかなり実用中心の記事が並んでいます。やがてここは〝欄〟から〝面〟へとまとまる一ページ使うところとなりまして、その時代が長く続きます。二ページ使い、あるいは二ページ見開きになったのは、一九八〇年代に入ってからで、最近のことです。最初にワイド化したのは毎日新聞で、一九八三年一月からです。四月に読売が、朝日は八四年四月から「味な見開き」とキャッチフレーズして魚のアジをあしらった広告展開をして、二ページ見開き化しました。

最近の家庭面は国連婦人の10年を経まして、生活実用面のようなものからくらしや女性のあり方についての全般的なオピニオンみたいなものを前面におしだすようになっているようです。男女雇用機会均等法について言及したり国際婦人年でのNGOの会議についての記事が掲載されたりと、「おそうざいのヒント」みたいな相変わらず家庭維持にかかわる実用記事は残っていますが、かなり問題意識的になってきていることは確かのようです。特に働く女性についての題材を多く扱う日本経済新聞夕刊の婦人家庭面はそういっていいと思います。そうなってくると、女性にかかわることはみんな政治、社会にかかわるのだから、とりたてて生活面や家庭面、あるいは婦人面のような面を設ける必要があるのか、家庭面・婦人面みたいなものがなくなっても社会面や経済面でこそ女の問題は論じるべきだし、家庭面は解消してしまってもいいのではないか、むしろいつまでも「女性」を特別扱いすること、女性についての記事

をみんなここにぶち込んで事足れりとすることのほうが問題ではないかという議論も当然でてきます。日経の場合は男性も読める生活とか暮らし、労働などについて考える内容ですが、しかし多くの新聞家庭面は相変わらず家庭面の中に男がちっともでてこない。でてくるのはどうしても母親と子育てとか老親の面倒見と妻との関係とか、そういうことばかりが多いのも事実です。そこで、いま言ったような家庭面廃止論のほかに、どうすれば家庭面を男も読めるようになるかということも考えてみたい、そろそろ考えられてもいい時期ではないかと、ぼくなどは思っています。

それから、鹿嶋さんには、家庭面がどういうふうに作られているかについても、おうかがいしたいですね。例えば社会面や政治面と違いまして、家庭面はいわゆるフィーチャー面と言われ、実際には記事を書いてすぐに紙面になるのではなく、何日か前に出稿してだいたい発行日より前に組版されるのですね。最新のニュースが載るわけではないのです。逆に言うとじっくり練られた長い記事が書けますけれど最新ニュースはどうしても家庭面には載りにくい、そういうデメリットもあるわけです。そういった実際の仕組みは、皆さん方もあまり御存知ないと思いますしぼくも 現業ではありませんので、家庭面がどういうふうに作られているかということをあとで鹿嶋さんから具体例を直接うかがいたいと思います。その上で、じゃあ、家庭面は本当に解消できるのか、それとも当分、家庭面は男も女もふくめて生活の情報のためまだまだ存在意識があるのか、ということなどを議論できれば面白いと思ってます。

家庭面はどういった記事から成立しているのか

そこで、女性と新聞メディア研究会で、八五年、八六年の一〇月の朝日、毎日、読売各紙の家庭面を調べてみたことについて、ちょっとデータは古くなってしまいましたが、具体例としてご紹介してみます。一九八六年は、読売新聞が「婦人とくらし」というタイトルをやめて「家庭とくらし」としたときだったんですね。またその頃朝日では二ページ見開き化と同時に、覚えていらっしゃる方も多いと思いますが「男の腕まくり」という週一回のシリーズが始まった頃で、家庭面に男性読者もひきずりこむというふうな紙面作りが試みられ始めた時期なんだと思います。そこで八五年、八六年一〇月の一カ月間の三紙の家庭面記事を、「社会」とか「自然・環境」「医療・科学」「生活」「教育・育児」とか分野を分類して内容分析してみました。

そのなかで一番多かったのが「文化」関連で、三紙ともに二割から四割ぐらいを占めます。その中身は「母と子のレコード」「熟年からヤングまで童謡ブーム」だとか、「変わってきた公共図書館」だとか、催事案内の「情報ク

リップ」などで、いろいろなレベルの話、「教育」というほどではない、文教関係の記事が多くなっています。この「文化」には家庭面と無関係な、ここにしか入らないのかもしれませんが、「アマチュア本因坊戦」だとか「名人戦」だとか、碁や将棋も含まれています。

その次に多いのが「生活」関連で、だいたい二〜三割あるわけです。「50歳からのおしゃれ」「手縫いを一緒に」とか、「食べ方色々」とか、「きょうのお料理」「食卓の一品」などお総菜のレシピだとか、「リサイクル・らいふ」だとか、生活関連でも特に衣・食・住にかかわったものですね。三番目に多いのは「その他」としか分類のしようのないもの、たとえば他の面に行ってもいいような小説だとか、「今月の暦」だとかです。

それとほぼ同水準の比率を占めて多いのが「投稿」で、朝日は「ひととき」、毎日は「女の気持ち」、読売は「人生手帳」や「赤でんわ」が主なもので、大体一〜二割を占めています。それから「社会」と、「わが家の子育て」「育児ＡＢＣ」「うちの先生」「子供ＮＯＷ」といった「教育・育児」が次に多く、だいたい一割ほどあります。家庭面というと、生活か投稿か、教育・育児か、さもなければ文化、そういう記事で大体埋まっているというのが現状です。

そして「医療・科学」ネタや「社会福祉」「自然・環境」といった記事は生活面といいながらあまり出てこなかった。

家庭面の分類項目別記事内容　（記事件数の％）

分類項目	1985年10月 朝日	1985年10月 毎日	1985年10月 読売	1986年10月 朝日	1986年10月 毎日	1986年10月 読売
社会	13.7	10.5	7.1	19.0	7.2	10.1
自然・環境	1.0	2.0	2.4	0.7	4.9	2.9
医療・科学	3.8	3.5	4.2	3.9	6.7	4.4
生活	21.3	18.4	29.2	21.3	22.2	15.5
教育・育児	10.5	12.9	3.0	5.2	10.6	4.4
社会福祉	1.6	4.7	1.8	3.3	2.2	0.5
人生	0.3	2.0	0.3	—	0.2	0.5
文化	20.1	20.9	22.0	14.1	24.5	39.3
女性学・女性運動	1.3	0.3	0.6	1.0	0.5	—
投稿	14.0	10.5	22.0	14.8	7.9	18.4
その他（小説など）	12.4	14.3	7.4	16.7	13.1	4.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

そして女性向けの面でありながら「女性学・女性運動」のようなものはほとんどみられないというのが特徴です。最近は、インフォームド・コンセントやがんのことなどがふれられる機会も多くなり、女性運動の集会についての記事も増えた印象を受けるなど、この傾向も少しは変わったかもしれませんが。

「女」や「母」がつき、女性が読者と想定されている連載記事のタイトル
および「男」がつき、男性が読者と想定されている連載記事のタイトル

1985年

	女性読者向けタイトル	男性読者向けタイトル
朝日	○女のインデックス ○女から女へ ○おんな輝いて ◎母と子の試聴室	男の腕まくり 男のインデックス
毎日	◎母と子の図書室 ◎母と子のレコード ◎ママの目　医者の目	
読売	○女性ライブラリー ○ワーキングウーマン内外事情 ○女の詩　女のうた ◎母と子の図書室	

1986年

	女性読者向けタイトル	男性読者向けタイトル
朝日	○女のインデックス ○働く女からの手紙	男の腕まくり 男のインデックス
毎日	◎ママの小児科ＡＢＣ ◎母と子のレコード	
読売	○淑女のミステリー ◎母と子の図書室 ◎おかあさんのパソコン教室	男のおしゃれ楽

○印は「女（ウーマンなども含む）」の付くタイトル
◎印は「母（ママなども含む）」の付くタイトルを表す

家庭面で男向けの連載記事がどのくらいあるかをみてみますと、八五年は朝日に唯一「男の腕まくり」「男のインデックス」というのが週イチのレギュラーであるだけで、毎日と読売では皆無でした。どれもこれも「女」ですとか、「母と子」ですとか「ママ」だとか、そういう言葉タイトルが使われていて、だいたい母親向けか女性向けの連載記事が載っていました。ところが八六年になりますと読売で「男のおしゃれ楽」というのが加わりまして、逆に「女」とか「母」というのがちょっとばかり減り、特に朝日が二件減って読売が二件減って、読売は男ものが一件増えてということで、八六年の均等法施行をはさんで家庭面は女性向けをちょっと減らし、男性向けみたいなものを少しばかり増やしたというのが多少読みとれそうです。

しかし実際には人々の新聞の記事内容別閲読率をみてみますと、男女で違いがあるんですね。やっぱり家庭面を男の人々はほとんど読んでなくて、女の人が圧倒的に多いということはあります。新聞協会研究所が一九八九年に東京で行った面別の注目率実態調査、つまり昨日の新聞で何面を読みましたかというリーダーシップ・サーベイによりますと、女性は「ラジオ・テレビ面」が89％とトップで「第一社会面」の85％とともにほとんどの人が読んでおり、次いで一面の「第一総合面」が75％、「第一家庭面」が64％に読まれていて、ベスト4です。一方男の人は「第一総合」

「第一社会」「ラジオ・テレビ」の各面が80％強の注目率でほとんど同水準で、次は「第一スポーツ」が70％と続きます。「家庭面」を読んだ人は四割を切っており、全ページ中最低でした。

いまみてきたように生活か投稿か文化といった記事から成り立ち、男性が興味を示さず、女性の性役割の固定化をメディア接触の上からも促進しかねないこの面を、どうすれば両性に開かれた面にすることができるか。次に考えてみたいと思います。

〝家庭面解消論〟と〝家庭面充実論〟

政治、経済、社会、スポーツ、国際といった題材別タテ割りの紙面の中で、ひとつ「女性」だけヨコ割りともいえる紙面があるのは、女性の特別視のあらわれであり、女性に関する政治、経済、国際や生活関連記事が、ここにゲットー化されているのではないか、という問題意識のもとに、家庭面の記事内容は政治や経済や社会面など他の面に解消しうるのでは、ということをちょっと実験してみましょうか。これもちょっと古いのですが八六年一〇月一日の朝日の11件あった家庭面記事をいっさいバラしてみたらということで色々試みてみました。

たとえば、「いじめに負けてはダメ」という記事は社会面に移るのではないかということで移すと。「うちの先生」、これも教育問題だから社会面に移すと。あるいは「教育面」みたいなものをレギュラー面として新設してもいい。今や新聞社は設備投資をして36ページ一連印刷ができるよう、増ページ体制にありますからね。「学園便り」、これも社会面か教育面ですね。「明るい悩み相談室」、これは家庭面にある必要は全然ないので文化面あたりに移すことができるかもしれません。

それから「高齢者支援へ企業並み組織」という記事は全米の退職者組織会長に聞いたものですが、これは社会面とか経済面とかに回せるんじゃないかということでこれも家庭面にある必要はありません。「おそうざいのヒント」、これは家庭面ではなくて一面の天気予報と同じような、広告だったら突出（つきだし）といいますけど一面のはじっこの方にでも移した方がよほど注目率も上がるし男の人たちも見るだろうし、独身だって読むだろうと。また、「エアメール」という海外トピックスの常設欄で「妊娠を告げない権利」という、スイスの新聞記事の紹介が、この日の家庭面にありました。スイスで、就職の際に雇用主に、自分が妊娠していても告げなくてもいい、という判決が出たという内容です。これは国際面や社会面でもいいでしょう。さらに投書の「ひととき」も、投書欄が別の面にあるのだから、一般投書欄に解消できなくもない。

このように、ここで見た範囲では家庭面にあった八六年一〇月一日の11の記事のうち、家庭面そのものになければならない記事は実は見当たらず、政治だとか経済とか社会とかの面でいくらでも対応できるのではないか、ということが実際にわかったんですね。けれど一方で、家庭面が、たとえ女性向けとして〝囲い込み〟がされている実態ではあれ、女性たちに発言の場を与え、固定読者を獲得し、均等法や国際婦人年について詳しく報道するなどしてきた重要な歴史的価値や功績を忘れるわけにはいきません。新聞がこの面で女性や生活についてふれなくなったら、一体どの面がやるか不安もないではない。いや、大いにあります。じゃあ、家庭面という存在がこれからも続くとして、その紙面を充実させていくにはどうしたらいいのか。女性の性を前面に押し出さずにですね、男の人も読めるような、生活にかかわる家庭面としてどういうふうに展開が可能かということで、今度は、総合面だとか社会面だとか政治面にある記事をどうすれば家庭面ふうに料理できるのか、そして男も読むようになるのかということを一九八六年一〇月一日の毎日の記事を使って実験してみます。

この日、総合面や社会面に載った、国土庁による全国基準地価の発表記事、この狂乱地価に関する記事などは、家庭や生活を逼迫する住宅問題として、家族問題、労働問題などの形で男性も読めるように家庭面に持っていくことはいくらでもできるでしょう。また当時、中曽根首相の黒人やプエルトリカンに対する人種差別発言がありまして、それに関して総合面でいくつか批判や寄稿文があったのですが、これを日常に接する機会も増えてきた東南アジアの外国人と、中曽根的なる日本人、ということを生活レベルで自省するために、家庭面で展開することもできるのではないでしょうかね。内政面にあった臨教審の記事、経済面の、当時の宮沢蔵相の「頼れる日本」を強調した演説の記事、同じく経済面に見られたマル優廃止で郵便貯金にも源泉徴収という記事なども、家庭面を舞台にして男性とともに広範な展開ができると思うんですね。それから「マネー&ライフ」という面――日経が「Ｍｏｎｄａｙ Ｎｉｋｋｅｉ」、朝日が「ウィークエンド経済」と、各紙経済ものを、しかも生活経済ものを週一回載せてますが――毎日も「マネー&ライフ」面で商品情報をかなり載せています。家庭面にあった情報が他面に移っていったという見方もできますのでとりたてて家庭面に戻す必要もないのですけれど、単なる広告記事のような商品情報ではなくて生活や家庭に必要なものかどうか、あるいはその商品を使ったときの副作用はどうなのかとか、もう少し生活に根ざした視点から練り直すこともできるのではないかということで、「マネー&ライフ」のいくつかの記事も家庭面で展開でき、ジェンダー色を薄められるのではないかと思います。それから社会面

には、0歳児保育が市によって拒否されたことに対する慰謝料請求訴訟の棄却判決についての記事が出たのですが、この記事も家庭面で論じることができるでしょう。

このように、速報ものは総合面だとか、社会面、政治面で載せることとしても、政治や経済や社会にかかわることはいくらでも家庭面で論じ直すことができます。今後家庭面が生き延びるとしたらこういうじっくりと中曽根発言を論じる、あるいは狂乱地価や0歳児保育を高裁が棄却したことを批判的に論じる、そういう家庭面のあり方がもう一つ可能かなと思います。〝解消論〟と〝充実論〟との両方を今回、ご披露してみました。

いまお話ししたことは、田中和子さん、それに女性と新聞メディア研究会の吉岡マリさん等と書いた紀要論文、『国学院法学』28巻2号「新聞家庭面の女性学」と題して展開したのですが、そのようなことをまとめていた矢先にですね、朝日が一九九〇年七月一日から家庭面を模様替えしまして、かなり〝女性向け〟の色あいが薄れてきた印象をもたせる紙面改革を行いました。この、脱・女性面化は、『新聞研究』一九九〇年一〇月号による朝日の家庭面担当者である学芸部デスクの文章、「生活情報重視の中の家庭面」によりますと、次のような理由によるらしいです。一つには常設コラムがだいたい三年が限度といったことがあるようで、「根ほり葉ほり」とか、日曜日にあった「さんでーすぽっと」――あの欄は漫画家の石坂啓さんが書いていて楽しみにしてたのですが――ああいったコラムは三年が限度だということ。もう一つは鹿嶋さんがおっしゃると思いますけど、家庭面だけでなく他の面も生活情報を扱うようになってきたということですね。そういう意味では家庭面は実質的には解体しつつあって、政治、経済、社会面など他面で商品情報やくらしの情報、女性の問題だとかいうものが扱われるようになってきた。それがもとで家庭面としてのレーゾン・デートゥルが薄れてくるわけです。したがって他面と違う差異化をしなければならなくなった、というのが理由としてあるらしいんです。商品情報みたいなものはソフト情報で他面で扱うようになって、家庭面としては二番せんじの感をまぬがれなくなったり、題材によっては社会面の方に抜かれてしまったりなどというようなこともあったらしいですね。

そこで朝日は、今回の紙面改革で金曜日の家庭面は国際ニュースを扱うようになりました。生活にかかわる国際ニュースを扱うようになったということはかなり画期的なことといえるんじゃないでしょうか。そのために今までやったことのない家庭面の記者を海外に送り出したりとか、今まで〝動き〟のある取材現場にいたことのなかった取材の不慣れみたいなものも克服し、生ニュースに取り組んでいきましょうということを考えているようです。八九年頃から

各紙は、天安門事件、M君による連続「幼女」誘拐殺人事件、Xデーの問題だとかその時どきの重要なイッシューを家庭面でも随分論じるようになりました。他の面によって、家庭面の〝得意領域〟が〝侵食〟されると同時に、家庭面も自分の部署の記者や外部の人の寄稿・談話を得て、社会面、政治・経済面的な内容を独自に扱うようになってきているわけです。海外ニュースに家庭面として積極的に取り組もうというのも、そのような家庭面＝女性面独自の領域を〝守る〟姿勢に移ってきたことのあらわれかもしれません。また、水曜日は教育面となっていますけど、この教育面も単なる教育ページではなくて、「学校面」にしようということで学校を主に取りあげようというのが一つのユニークなところに思えます。教育面というのは特に毎日新聞がお得意で、読売新聞も力を入れているようですが、「荒れる学校」について各紙随分書いた時期がありますが、学校側も敷居が高くなりまして取材がしにくくなってしまったのですね。で、ここ数年の教育欄というのはどこの新聞でもあまり活発化してませんで、行政の発表もの・傾向記事が多くなって、実際の学校とか教育現場の記事が少なくなってきたような事情があるらしいです。「教育」は今やその自律的能力を失って、教育イコール学校、というステレオタイプ、他律化・学校化が生じていますよね。学びや教育は学校でなければできないように人びとが思い込んでいる。それゆえに学校は「治外法権」の場所になり、外の厳しい監視の目にさらされなくなって、教育や学びの機能がすべて学校に委譲されると、世間の目では通じない独自の論理が大手をふってまかり通るようになるわけです。ジャーナリズムの世界は、新聞のみならずテレビや雑誌もそうですけど、そういう治外法権の密室の世界にどうやって監視の目を向けてインサイドに斬り込むかが使命ですから、家庭面で、一般論的な〝教育問題〟ではなくて〝学校問題〟にとりくもう、ということのようです。

それから、男も読む、あるいは男たちの男女平等への取り組みを紹介し両性に知らしめる記事として、半年間の担当だそうですが佐藤洋子さんがインタビューする、土曜日の「男に聞く」という欄が始まりました。また、火曜日のインタビューで「ゴ問ゴ答」、日曜日の「さっそく体験」という、家庭面の記者が実際に体験したルポルタージュも始まりました。「さっそく体験」は、たとえば大学で行っている服を着て泳ぐユニークな授業に参加して、着衣で泳ぐとどれだけ危険なことがあるか、またそれを一度経験しておくといざという時どれほど役立つかというようなことを記者の実際の体験から取材した記事とか、〝女性向け〟とされるような記事をかなり減らすような努力をしているように見受けられます。朝日の試みがこれからどう定着す

るのか、各紙がこれからどう変化するのか、見守っていきたいものです。

我々の批判してきた家庭面イコール女の問題のごった煮ではないかというようなもの、あるいは小説から碁から何でも入っていて掃き溜めみたいではないかというところからは最近は脱却しつつあって、いま、生活面がおもしろい。ただ、いざこのような改革が実施されると、女性面みたいなものがなくなってつまんないなと思うところもありますし、さて、他の面がちゃんと女性問題をふれるかどうかが、これからの正念場になるのではないでしょうかね。これからは、家庭部セクションの記事が一面や社会面を飾り、政治部や国際部が家庭面の記事を書くような相互乗り入れや、部際間の交流が進むと、もっとおもしろくなると思うんですが。

男性による定型化された女性の扱い

次に、新聞表現で問題のある表現が実際にどれほどの量あるかを、一九八五年の一〇月一日から一五日まで調査したデータからみてみましょう。新聞で使われる言葉は、雑誌や放送にも影響を与えていますし、日本語の標準のような役目を持っています。しかも八〇〇万とか九〇〇万とか大量の部数出てると日常でも定着しますね。日刊新聞は一日に全国で七一四六万部発行され、それをだいたい三人が回読していますから、単純にいえば実に二億一四三八万人もが毎日「女性秘書」とか「独居老女」とか、「強姦」を言い換えた「暴行」という言葉や、「女性三人を含む五人が」などといった珍妙な表現に接しているわけです。テレビもそうですがくり返しのこわさ、大量現象のこわさがある。

そのような新聞の、女性に対する表現は、結論からいうと〝男が基準で女はその例外〟という扱いです。〝女性である〟ということを強調してですね、男であればただの「職員」「教師」「俳優」「王様」とかですんだのですが、これに「女子」だの「女」だの「女性」だのの冠詞をつけるわけです。逆に「王様」といえば男の人しか意味していないし「俳優」といえば男の人を主に表しますし、いちいち「男子職員」とか「男性教員」とかわざわざ滅多に言わない。ましてや「男王」とか「男流」、「男医」「魔男」などという言葉は存在しないですね。このような、職業や身分を表す名詞の上に「女」や「女性」、「女子」「女流」といった語のつく〝女性冠詞〟を全部集めますと、八五年一〇月の半月間ほどに、朝日、毎日、読売三紙合計で129種類、402件もみつかりました。一紙平均すると一五日間で134件、一日当たり9件、こういった言葉が使われている計算になります。一方、〝男性冠詞〟は同じ期間中で「男子

1985年10月1日〜15日紙面における女性冠詞の数　（件数）

女性冠詞例	朝日	毎日	読売	計
女優	32	40	39	111
女子中学生	9	12	8	29
女王	4	5	9	18
女子大生	5	5	3	13
女流作家	1	8	3	12
女子学生	4	0	6	10
女生徒	3	3	2	8
女子生徒	0	3	5	8
女教師	1	1	3	5
女性秘書	5	0	0	5
女子高生	2	2	1	5
その他	61	61	56	178
合計	127	140	135	402

生徒」といった表現が23件しかなかったんですね。つまり95％が〝女性冠詞〟なわけです。職業や身分を表す名詞は男が自明視されて、女の人が例外として扱われている、女の人にはわざわざ「女」とつけて区別する、そういう表現が非常に多いと言えます。本来ならば中性的・ジェンダレスな職や身分に、「女性パイロット」とか「女医」とかつけて女性をことさら強調することは、黙ってれば男性の職・身分を表すことが当然で女性は基準外、少数、珍しいということのほかに、「女ゆえ」という評価がそこにすべりこむ、そういう危険性・おそれがあるという気がするんですね。社会面などで「女子行員」が容疑者として事件を起こしたと報道されると、単に「銀行員」とされるよりも、どうしても属性としての「女」であることが強調されて女性だから犯行をおかしたと思われ、新奇なこととされてしまう。マスメディアは、「新奇性」や「意外性」にニュース・ヴァリューがあると考えますが、同時に、あまりに新奇であるよりも、大衆の了解可能な物語の枠内におさまるストーリーを好む傾向もあります。了解不能よりも「やっぱりね」とか「さもありなん」というような〝お話〟がウケる。「女子行員が愛人に貢ぐために犯行」とか書いてあると、単に「銀行員が犯行」と記述されているよりも、「さもありなん」と面白く・納得されるわけです。従って、こういう新聞やテレビ・雑誌などの表現を批判するためには、私た

ち自身の、性別や年齢などの属性を知って〝お話〟を作りたがる心性についても、少し考え直さないといけないですね。

それから女性専用の職として男性にはない、「看護婦」「OL」「ホステス」「保母さん」「キャリアウーマン」「秘書嬢」とかいうものも多く、期間中に24種類、89件みられました。こういった、職業以外の表現にはほかに、「奥さん」だとか「主婦」「夫人」、これらはだいたい結婚後の呼称が多いと言えると思いますが、夫や家に対して従属的にいわれる意味合いが強い「未亡人」「嫁」「家内」といった言葉も多かったですね。このような他者との関係で女性を表現する言葉は先の「主婦」「夫人」始め31種類、三紙で579件もあります。一紙平均すると193件、一日に一紙当たり13箇所で使われている計算です。だいたい女性は家庭的役割、私的な領域の呼び方がずっと多く、私的領域での男の呼称は「主人」「亭主」などといった――だいたい「主」とか、つかさどるものとかが多いんですが――これらは女性の表現の九分の一、63件しかありませんでした。

新聞にはそのほか、量的にはなかなか見えない、女性に対する固定観念、女らしさに関するステレオタイプな文章表現があります。「チャーミングな」だとか「女心」「女らしいしぐさ」だとかいった容姿やしぐさ、心理や行動、そういう文脈のなかで「女性」性が強調される表現が非常に多い。「色白の美人記者」とか「乙女のマナー」「薄幸の

他社との関係で女性を表現する言葉の数　（件数）

用例	朝日	毎日	読売	計
主婦	81	88	90	259
夫人	45	52	47	144
奥さん	14	9	5	28
嫁	14	5	6	25
女房	7	7	7	21
花嫁	4	3	6	13
未亡人	1	4	6	11
姑	8	2	1	11
内妻	1	6	2	9
家内	8	1	0	9
その他	19	11	19	49
合計	202	188	189	579

少女」「二児の母」「母親の心配」「買い物かご片手の主婦」などといった定型文は、同期間に399件ありました。買い物かごを下げているからといって主婦とは限らないんですがね。これが男の人に対してだったならば、「二児の父」だとか、「厳しい鹿嶋さんの顔も、ここではにっこり笑ってパパの顔に戻った」なんてことはあまり言われない。多くが女性についてだけ「チャーミングな鹿嶋夫人」だとか「とても二児の母とは思えない松田さん」とか記述されるわけです。こういった、主に女の人ばかりに使われる決まりごとみたいな表現は、「女らしさ」か「母親らしさ」か「主婦役割」か、さもなければ風俗関係の女性についての表現か、この四つでだいたいすんでしまう。一方、男の人の固定観念に基づいた表現はいくつあるかといいますと、女性が半月で399件だったのに対して男の人については72件でした。「騎士道精神」とか「男らしさ」の表現が一番多く、その次に「父親の後ろ姿」といった「父親らしさ」、それから「一家の大黒柱」といった「働き手」の役割とかそういうのがあります。量的に微々たるものであるとともに、内容的にも随分違いますよね。

男性のかげに隠される女性の扱い

さらに見えにくいことでいいますと、日本の表現には女性が隠される表現が多いんですね。家族とか夫婦、親の代表は、夫がいればだいたい夫が書かれることが多く、災害報道でも誰かの家が焼けると「会社員鹿嶋敬さんの家」というふうに男性のフルネームで報道されることが多いですね。それから子供の親が紹介されるときも個人名は男性の名が圧倒的に多くて、女性の名前が出されることはほとんどない。これらはまあ、世帯主が男の人が多いせいでしょうが、それにしても女の人が保護者としてでるケース、一家の代表として女の人の名前がでるケースはまずないといっていいでしょう。

それから事件の当事者としての女性、被害者として女性が出るときにもですね、松田敏子さんが一〇〇万円引ったくられたようなときには、「松田祥男さんの妻敏子さん」といったように敏子さん自身が被害にあったにもかかわらず夫のフルネームで「その妻」となる。全然当事者扱いしてくれないんですよ。逆に、祥男さんが被害者になったとして「松田敏子さんの夫祥男さん」と書かれることなど考えられないんじゃないでしょうかね。事件の当事者として出てくる女の人も、男に従属している表現ばかりが目立つわけです。代表するのは常に男性。社会の公（おおやけ）に立つのは男で女性は社会の表面下に隠す扱いがあって、見えない性差別が働いているとすごく感じられます。これは、新聞社として表現の仕方を改めればいいという単純な話ではなくて男

のものの見方そのものを変えていかなくてはまずいだろうという感じがします。

それから鹿嶋さんもおっしゃると思いますが男の人が「氏」で女の人が「さん」といった、そういう敬称の使い分けがあります。大体女の人は「美しさ」とか「若さ」が基準となって、男の人は「業績」が基準になる表現が多いですけれど、女の人は「さん」をつけると柔らかい雰囲気があるということで「氏」はあまり使われない。そして明らかに「氏」より「さん」のほうが格が低いんですね。同じ記事のなかで男の人に氏を使って女の人にさんを使うとしたらこれは立派な上下の差別の問題だと思います。「氏」に代わるのは、女性の場合は「女史」ですかね。「ブット女史」「サンガー女史」とかですね。なんとか女史と使うのが非常に多く、調査期間中32件ありましたが、これも〝女だてらに〟というか〝女丈夫〟というイメージがまとわりついた言葉となっている。特に「さん」と「氏」の使い分けは死亡記事に大変多くなっています。同じ死亡記事のなかで、男の人が死ぬと「氏」、女の人が死ぬと「さん」と見事に使い分けられているだけではなく、喪主が男だと「氏」、喪主が女だとやはり「さん」というふうにダブルスタンダードがあって、例えば「喪主は長男の○○氏」かと思うと「喪主は妻の××さん」というようにですね。何と期間中はこういった使い分けが153件ありました。

女性と男性で異なる敬称・呼称　（件数）

	用　例	朝　日	毎　日	読　売	計
同一記事中で	女性が「さん」、男性が「氏」	3	5	4	12
	女性が「女史」、男性が「氏」	2	2	0	4
	女性が下の名、男性が苗字	1	3	1	5
	女性のみで「＊＊女史」	7	18	7	32
同一死亡記事中で	女性が「さん」、男性が「氏」	45	62	46	153
	男性のみで「氏」	6	14	10	30
	女性のみで「さん」	1	2	2	5

男女の呼称の使い分けとしてはほかに、女の人をフルネームで呼ばない風潮です。「小谷実可子」ではなく「実可子」ですとか「和美さん銃撃事件」とかですね、「聖子」「明菜」「紀子さん」、みな名前でしか呼んでくれない。同一記事で二番目に書くときや見出しは、フルネームや「川嶋さん」とは呼ばないんですね。これが男ですと「俊樹さん」とか「ナルちゃん」とは誰も呼ばないですね。あきらかに〝女性らしさ〟の表現、風俗産業とか芸能界では「ちゃん」づけで下の名前だけで呼ぶ風潮がありますが、近しさとか親しさとかあるいは誰かの所有物・従属物である印象を与える表現といえます。これらの表現内容についての詳しい分析については、先の紀要論文とはまた別に、女性と新聞メディア研究会の田中さん、本郷みどりさん、小柳圭子さんらと『国学院法学』28巻1号に、「新聞紙面にあらわれたジェンダー」と題して書きましたので、興味のある方はごらんください。

こういった見える性差別表現や見えない性差別表現が新聞記事の中にあって、日常語として我々の中に無意識に刷り込まれていくということがすごくあると思います。いま、新聞業界ではNIE（教育に新聞を）運動と称してテキストや教材として新聞が学校で使われるようにするキャンペーンを展開中ですが、なおさらこういうケースが流布されかねないという恐れがありますので、注意深い表現が必要だろうとぼくは感じています。

メディアから男性のみの視点を排すために

最後に、こういった新聞や新聞記事表現、それに広くマスメディアの男性中心主義的内容を作り出す側の〝男の職場〟としての送り手の問題について話させてください。ご存じのように、マスコミ企業は新聞も放送も出版も広告も圧倒的にオトコ社会ですね。新聞の場合は全社で六万五〇三六人の従業員中女性はたった四八五九人（一九九〇年）、編集部門にいる女性は一七二〇人でしかもそのうち直接に記事を書ける女性の記者は全社で九二六人、全体の1.4％にすぎません。民間放送局の従業員総数は二万八四六九人で、うち女性は五二七六人（同年）、女性の記者は全社中一〇七人で0.4％、制作の部署にいるディレクターは二一二人、0.7％という有様です。またNHKは、総従業員は一万四六五四人、そのうち女性は八六〇人ほどで（同年）、記者は二二人、0.2％、女性のディレクターは一五四人、1.1％というのが実情です。こういう送り手の女性の少ない惨状では、メディア内容が男による男のための内容となるのはむべなるかなですね。起きたできごと、収集した情報は記者によって記者の眼を通して取材され、書かれ・撮られ、それがデスクやディレクターによって取捨選択され、整理されたり編集されたりして送出されますが、そういった情報の流れ・加工の段階でことごとく〝男の門番（ゲートキーパー）〟が立ってチェックしているわけですね。日本の場合は、デ

新聞社従業員の内訳人数（1990年）

	女性	男性	計
編集	1,720	24,135	25,855
製作・印刷	476	16,103	16,579
発送	19	2,605	2,624
総務	1,373	3,527	4,900
営業	689	7,930	8,619
出版	176	1,436	1,612
その他	406	4,4441	4,847
総計	4,859	60,177	65,036人

日本新聞協会調べ（100社対象）

編集部門の内訳人数（1989年）

（ ）内は女性内数

社名	総数	総括	論説委員	編集委員	整理	校閲	政治	経済	社会	地方	学芸婦人文化	科学	運動	写真
朝日	1,359人	14	26	2	80	82	50	62	121	81	76	17	27	39
（東京）	(82)	(0)	(0)	(0)	(5)	(6)	(2)	(3)	(4)	(3)	(9)	(0)	(0)	(0)
毎日	965	5	19	27	76	65	36	40	91	53	46	8	26	37
（東京）	(48)	(0)	(0)	(1)	(2)	(1)	(1)	(3)	(6)	(1)	(5)	(1)	(1)	(0)
読売	1,714	7	20	40	96	102	48	69	99	103	56	18	27	46
（東京）	(95)	(0)	(0)	(1)	(1)	(6)	(1)	(5)	(2)	(8)	(10)	(1)	(1)	(2)
日本経済	1,103	10	18	42	112	55	22	315	31	10	24	11	8	18
（東京）	(57)	(0)	(1)	(1)	(1)	(7)	(0)	(19)	(1)	(0)	(7)	(1)	(0)	(0)

社名	外信	通信連絡	航空機	調査資料	記事審査	読者サービス	ラジオテレビ報道	ラジオテレビ欄	編集庶務	支社支局通信部	その他	新規採用	女性記者	海外駐在員
朝日	100人	18	25	55	7	1	44	1	32	319	45	35	61	42
（東京）	(2)	(0)	(2)	(8)	(0)	(0)	(2)	(0)	(3)	(18)	(10)	(5)		
毎日	46	24	11	23	—	6	—	15	15	249	8	39	30	27
（東京）	(1)	(0)	(0)	(3)	—	(0)	—	(1)	(8)	(8)	(1)	(4)		(1)
読売	83	114	21	76	17	6	49	—	36	396	100	85	71	52
（東京）	(3)	(3)	(0)	(6)	(1)	(0)	(2)	—	(1)	(11)	(17)	(13)		
日本経済	122	63	—	4	1	2	24	—	10	105	24	72	23	66
（東京）	(8)	(0)	—	(2)	(0)	(0)	(2)	—	(2)	(0)	(0)	(5)		

スククラスである社会部や生活家庭部などの部次長、雑誌の副編集長以上の女性は、まず量的にいっても極端に少ないわけです。

アメリカでは、早川与志子さんによりますと、マスメディア産業のなかで部長以上のクラスについている女性は25％いるそうです。また重役クラスは少ないとはいいながら8％ほどいるという。今はアメリカは「ガラスの天井」といわれまして、女男の能力差なしに女性はかなりの地位までは行った、しかしなおかつガラスの天井という見えない壁があってつかえている、という点が問題になっています。日本では、「ガラスの天井」どころか眼に見える壁がいまだにあるわけで、大違いです。

もう一つは、マスコミ産業は抜いた・抜かれた、夜討ち朝駈けだと、大変に戦場じみたモーレツ企業、つまり男性的な――ということは不健康で非人間的な、かつ戦闘的で業績主義的なということですが――そういう企業だ、ということがあります。よく新聞などでも、男女は平等だ、働きすぎはやめようなどと社説等で書いていますが、それは多分にタテマエ的で、当の会社のホンネは特ダネ・スクープ主義、視聴率至上主義、そして販売部数拡張主義で、女性記者を増やして育児休業をまともに取られては他社との競争に負ける、というのがホンネなのではないか。新聞紙もテレビ番組も雑誌も、私企業の〝商品〟ですから、その売り上げが会社維持と成長・発展の至上命題なのですね。しかもマスメディアはＮＨＫ以外は販売収入よりもスポンサーによる広告収入のほうが大切ですから、そこに当然、商業主義、売らんかなの論理が働く。マスメディアの内容における女性差別的・男性優位的な内容は、このようにマスコミ企業の生産至上主義というか男性中心主義を射程に入れて考える必要が出てくるわけです。そういうところを変えていかない限り、男性従業員も変わらないしメディア内容も変わらないのではないかと考えられます。

一方で、スクープや特ダネ競争をやめたらそれはもはやマスメディアとしての責務のほとんどはなくなってしまうわけで、女性の従業員がマスコミ企業にどんどん増えると同時に、人間らしい職場生活を確保しつつどのような有用な情報内容を送出してゆくか、これからはこういったことも問題として考えられていかなければいけないのではないかと思っています。

「日本のいまの男」たちの一人が、こんなことを考えている、ということを話させていただきました。

フェミニズムの網をかけ、世の中を見る

日本経済新聞社婦人家庭部次長　鹿嶋　敬

新聞作りの最先端でどういうふうにそれを行っているのかを話してみたいと思います。私は今デスクという仕事をしています。デスクは現場の責任者、どういう新聞を作るか、その責任を持っています。まず婦人家庭欄の話からしたいと思います。私は新聞記者の大半が婦人部の記者でしたので、他の職場はあまり知りません。

婦人家庭部の記者とよく議論するのは、いま婦人家庭欄が必要なのだろうかということで、男女平等の世の中だったらいらないはずだという意見もあります。さらに婦人家庭部というネーミングが古いという指摘さえあります。先日、ラジオ番組で、ある大学の先生が日経の婦人欄はいまだに「婦人」という言葉を使っている、体質が古いという趣旨の話をしていましたがそんなことは言われなくても、よく議論していることなんです。

私個人としての考えでは、まだまだ婦人家庭欄は必要だろうと思っています。労働省に婦人家庭局が必要なのと同じでして、あらゆる場面で男女間の格差がある以上、そうした問題にポイントを置いた報道は必要だろうと思うのです。また、新聞をよくご覧になるとわかるのですが、最近は生活関連の情報をかなり重視して読者に提供しています。日本経済新聞でも、生活関連情報を記事にしているのは、婦人家庭欄だけではありません。例えば夕刊の社会面でも生活に密着した企画物、婦人欄と名づけても決しておかしくないような記事を作っています。

さらに日経では、アーバン・ナウという紙面が夕刊にあ

ります。これはいわゆる都市型生活者への生活情報の提供がねらいで、全体のニュアンスからいえば、婦人家庭欄と名付けてもおかしくはありません。最近は、男性の生き方について考えてみようと、日曜の朝刊には「ライフスタイル」なる紙面も設けている。これも広い意味で、婦人家庭欄にとりこめる紙面だと思っています。こうしてみると、各紙面の境界線が大変ぼやけていることがおわかりいただけると思います。このため、確かに「婦人家庭欄」という呼称は古いとか、昔風というイメージがある反面、特徴なり個性を出すには、あえてその冠をつけておいた方がいいのではないかというのが私の考えです。

男と女の関係学を紙面化

さて婦人家庭欄では、女性だけを扱っているような印象を与えるかもしれませんが、そうではない。女性を〝主語〟にしますと〝脇役〟として男というのがついてまわる。あるいは男性を主語にしますと、女性を抜きには語れない。結局女性だけを扱うという事はないんですね。必ず女性と男性と両方扱うという事になるわけです。私ども婦人家庭欄は、かなり働く女性を意識した記事作りをしている。私がかけだし記者だったころは、都市型の、三・四十代の専業主婦を頭に置いていたような気がしますが、昭和五十年代の後半になると、それでは記事が書きにくいことがわかった。女性のライフスタイルが多様化しだしたのです。特に働く主婦は労働省の調査などをみますと昭和57年から二人に一人になっている。ですからいまは、特に月曜日の紙面は、ワーキング・ウーマンに焦点を絞った紙面作りをしています。要するに現代女性はいろんなライフスタイルがあり、いろんな顔を持っているので、それに合わせた差別化がどうしても紙面作りの上で必要なのです。月曜日の紙面は、均等法以降の職場の状況だとか、均等法施行以後職場でどういうふうに仕事をしていけばいいのか、さらには女性たちの仕事のネットワークにはどういう物があるのかといった記事を載せています。このため、専業主婦の方はあまり関心が持てないのかもしれない。マスコミとはあらゆる人に読んでもらう記事作りをしなければいけないわけで、そういう意味では、いま、婦人家庭欄の作り方が難しくなっている。差別化とは、ミニコミ化したということですから。でも、女性がさまざまな顔を持ち、複雑化が顕著になってきた以上、それは仕方がないことだと考えています。

企画をめぐって激論

次に記事をどういうふうに記者は作っているのか、具体的に述べたいと思います。婦人家庭欄はニュースものでは

なくて、いわゆる企画物が中心です。毎週、企画会議を開いて、そこで各記者からそれぞれ書きたいテーマを申告してもらうわけです。その席では、企画がものになるかどうか、ディスカッションを激しくやり合います。企画会議は年令差を取っぱらい、言いたいことを言い合うということにしています。みんな自分で出した企画だからしっかりPRする。しかしどうしたって物にならないものもある。

どの企画を採用するか、最終的に結論を下すのは部長やデスクです。そういう意味では、これから女性のデスクがもっと誕生してもいいと思いますね。今、新聞社に女性の編集委員はけっこういます。編集委員というのは専門職で、自分の専門的な分野、テリトリーをカバーしていればいい。一方デスクは、紙面の全体の責任を持つわけです。記者が出した企画を月曜日から金曜日までの紙面の中にどんな風に配分しようかといったことまで頭に入れて仕事をします。働く女性向けの記事が多すぎたから、今週は、家庭にいる主婦たちの行動にポイントを置いてみようとか、消費者問題をぜひ掲載しようとか。

また、記者の書いてきた原稿には厳しく目を通します。記事にバランスが取れているか、切り口に非凡さがあるか、差別的な表現はないか、文章はこなれているか、など、かなり神経を使います。全文書き直しを記者に命じることだって珍しくありません。婦人家庭部は女性を取材対象にして、優雅に仕事をしている、なんて冷やかす声もあるけれど、とんでもない。わが部に配属になった記者は、デスクにどなられたりして、あまりの厳しさにうんざりしたりする向きもいる。特に新人記者は大変です。結婚もしていないのに、夫婦の心の機微などについて書かなければならない上に、原稿が難しいとあって脂汗を流して頑張っている。でも多くの記者は、時間の経過とともに、そんなハードルをクリアしていきます。

手前みそな言い方になるかもしれないけれど、読者にとってつまらないかもしれない記事ひとつを取っても、情報の送り手としては記者もデスクも真剣勝負をした結果なのです。体に無理をかけてまで、いや、体を削ってまで紙面作りに没頭しているなという実感がありますね。健康を考えればそれではいけないんだけど。

記者の生活体験、バランス感覚を重視

いま、私どもの部には女性記者が五人います。会社全体からすれば女性の記者はまだ少ないけれど、最近は毎年十人くらい採用していますから、これからは女性が相当な戦力になってくると思います。女性の記者と男性の記者と差があるのかといった問題ですが、ありませんね。私どもの部では、むしろ女性記者の中に優秀な活躍をしているもの

がいる。物の見方にも差はないように思う。差があるとすれば、それは生活スタイルの違いから出ると思う。婦人家庭欄は自分の生活が大変企画に反映しやすい部です。私が働く女性の問題に関心を持ったのも、一つには我が家が共働きで、私自身、子育てにかかわったり、熱が出た子を保育園に連れていけなくて途方にくれたこともありました。そんな経験が女性の労働問題に首を突っ込む契機になっている。

子育ての負担はまだまだ女性のほうが多いわけですから、そこでいろいろな矛盾だとか悩みがあるわけです。それを企画にストレートに反映できるんです。自分の生活体験を記事にできるということでは、婦人家庭部の記者は大変めぐまれていると思います。企画会議に出てくる企画の内容は生活体験から裏打ちされてくるということで、男性と女性はちょっと違いがあるわけです。最近は若い記者の間から男女を問わず、夫婦別姓の問題とか、ミスコンの是非を問う企画が出てきている。部内には、ミスコンのどこが悪いんだといった意見もあります。いろいろな考えの記者がいるのはいいことだと思っています。一つのテーマの結論を一方的に決めてかかり、それに向けて突っ走るという記事作りだけはしたくありません。記者への指導も、「問題点を整理し、反対派、賛成派があるならどちらの声も載せるように」といったことは言いますが、後は記者に任せ、とにかく、バランスを重視します。

女性記者だからといって、遠慮はしません。分析が甘ければ、大声でどなったりする。彼女ら、私の怒声に耐えて仕事をしているわけで、みんなかなり前向きな姿勢と仕事意欲を持っていると思います。女性記者がどんな風に育っていくかは、デスクとして楽しみでもあるわけです。新聞社としてもきちんと処遇を考えなければなりません。

政治・経済にも必要な女性の視点

新聞というのは、自分の趣味で作るわけではありません。例えば、女性は子供ができたら家にいるべきだと考えているデスクがいたとしても、では、専業主婦擁護の記事ばかり載せるかといえば、そんなことはないわけです。やはり時代の流れというものがあるわけでして、その流れに乗った記事は、最低限、読者に提供しなければならない。婦人家庭欄についていえば、デスクがどんな哲学を持っているかは、じわじわと紙面のできばえを左右することになると思います。

私としては、記事で扱うテーマにフェミニズムの網をかけ、世の中をながめていこうと思っています。といって、女性におもねる記事を作るつもりはありません。婦人家庭部の記者に私がどういうデスクか聞いたことはありません

が、女性の記者がこれから育つかどうかは、デスクに恵まれるかどうかにかかっているでしょうね。ま、これは新聞社だけに限った話しではありません。よその企業だって、女性社員が力を発揮するか否かは、上司次第といった側面があると思います。

女性記者が新聞社に根を生やすつもりなら、やめないことです。せっかく記者として入ってきても、やめていく女性もいるわけです。まあ、いろんな理由があるのでしょうが、仕事がきついという人もいる。結婚して両立していくのがむずかしいというケースもある。あるいは最初入ってきた当初は大向こうをうならせるような記事ばかり書けるわけではなく、地道な取材の連続で、それにいや気がさすとか、さまざまな理由があるわけです。でも、厳しいこともあるでしょうが、続けてほしいですね。結婚しても、家事、育児負担が女性にのしかかる現状では、働き続けることは苦労も多いわけですが、それでも頑張り続ける記者もいるわけです。もっとも、最近は男性記者だって、気軽に辞める人がいる。「辞められると困るから、あまりしかるなよ」なんて、周囲から言われたりします。私は、かなりどなって教育する方ですから。これからは、その流儀が通用しなくなるかもしれません。

女性の記者が共働きを続けるのは大変です。社会部とか政治部に配属になれば、夜回りもあるわけです。大臣、役人、さらには役所の幹部、あるいは財界関係者らの自宅を夜訪問し、ニュースを取るわけです。夜中に帰っていなければ家に上がらせてもらい、帰るまで待っていることもある。婦人家庭部はその点、夜回りなどありませんから、女性も働きやすいはず。しかし、女性記者だと、すぐ婦人部とか学芸部というのもまた問題があるわけです。政治とか経済といった大状況を扱う記事にこそ女性の視点が必要なわけで、その意味ではそうした部にもっと女性が配属になる必要がある。しかし時間がハードで、家庭との両立になると大変厳しいわけで、そのあたりのジレンマをどうクリアするかが、これからの課題でしょうね。

男性の生き方にもメスを入れる

新聞記者はやはり政治部とか経済部への希望が多い。ただ、最近、婦人家庭部にいきたいという新人がけっこういましてね。昨年も数人が第一志望だったと聞いています。男性記者にそういう人が出てきたことは、心強いですね。婦人家庭欄は、イメージとしては地味ですから。新聞記者のイメージは多分事件記者とか、あるいは政治記者とかだと思うのですが、家庭欄は、そういう意味では日々の我々の生活の積み重ね、それをいろいろな分野から取材しているわけです。それも切り口を多くの角度から考えなければ

ならないなど、苦労も多く、志望者がわっと増えるような部ではない。ただそんな中、三、四人という少ない数であっても、第一志望で入ってくる記者が出てきたということは、やはり時代が変わったなという感じがしているのです。

記事の内容は、最近は男性の問題を比較的多く扱うようになりました。女性の生き方だけを考えているのも限界があるような気がしますから。それからもう一つは、このへんは私の趣味として考えてもらえばいいんですが、女性が働くべきか否かという事はうちの紙面ではもう載せていません。働く女性が大きなパワーになったわけだから、どうしたら職場で能力を発揮できるかといった、大変実用的なところにポイントを置いている。夫の家事参加の問題なども、かなり具体論に入っている。金曜日のコラムでは家の間取りから考えていこうと、共働き向け用の住宅のあり方の連載をしている。子供が小さい頃から台所が好きになるには台所に置く棚の高さをもう少し低いものにしたほうがいい、大人のレベルで高いところにすると子供は手を伸ばそうとしない。低ければそこから自分で皿などを取り、台所仕事に自然に手を出すようになるといった具体論を書いています。

婦人家庭欄は個性的

差別表現はあってはならないわけで、記者も注意していますが、それ以上にデスクも厳重にチェックしている。女性についての差別表現となりますと、まだ不徹底なところがあるかもしれない。男の視点では差別ではないと思う事が、実は女性の側から見ると差別だということもあるわけです。

婦人家庭欄の難しさは、記者がどんなスタンスに立つかで内容が違ってくるということです。例えば均等法施行以降の職場の状況を書くとします。女性の甘えがまだ横行していると決めればそれで書けるわけです。しかし、違うんだ、やはりまだまだ男性社会の論理が幅をきかせているという立場で記事にすることもできる。私はいろんな見方があっていいと思う。繰り返すようですが、女性の差別を助長するような記事は作りませんが、といって、一方的に女性の声だけを代弁するものも作るつもりはありません。婦人家庭欄ほど、個性的な作り方ができる紙面はありません。なぜかというとニュース部門は大体発表物が多いわけです。お役所に記者クラブがあるでしょう。あそこに行くと定時に発表がありますから、各紙のニュースは、よほどの特ダネでもない限り似ています。ところが家庭欄については全部違うはずです。というのはその部の個性というか、あるいは書いてる記者、デスクの紙面作りの哲学が反映されるからです。新聞のなかで、個性的な顔を持っているという自負があります。

討論のまとめ

現場に女性の視点を

松田敏子

新聞・テレビ・その他のマスメディア抜きに、日常の生活は考えられない。しかし日本の社会を反映するように、その取材や編集は大部分男性の手によってなされている。片方の性による視点で多くが作り出されることにより、受け手に与える影響は非常に大きい。

A　ジャーナリズムが教育を監視するということはどういうことだろうか。

諸橋　新聞の機能としては、単なる報道以外に、オピニオン機能、娯楽機能、権力監視機能がある。今は、教育や自律的学習が「学校化」し、そういう意味では新聞が学校を監視しないほうが怠慢だと思う。マスメディアも、管理教育ではないような学校をつくる教師を育てる教育的視点が必要。

B　長く家庭欄を担当しての感想と、記者の新人教育について意見を聞かせて欲しい。

鹿嶋　二〇年在籍している。一つの部に長くいる記者は少数派だが、じっくりと専門的に一つのテーマに取り組める利点がある。婦人部の記者は扱うテーマが広いので、男性記者には積極的にフェミニズムの視点に立つ問題や婦人労働問題などの取材をさせている。男性記者にも女性が抱える問題を理解させないといい記事は書けない。オールラウンドプレーヤーであり、かつ、専門もある記者を育てていきたいと思っている。

C　女性問題解決のためには一般生活論に解消されてしまわない欄が必要だと思う。女性問題が他の紙面で扱われたとき、デスクもバラバラだし、婦人欄で扱っているような視点でやれるのかどうか考えてしまう。

司会　男性は変わり得るのだろうか。

鹿嶋　男性も変わってくると思う。職場にゆとりをという掛け声がある一方で、過労死の問題がクローズアップされるのは、その背景に長時間仕事をしなければいけないという厳しい労働環境があるからだ。男性が変わるというのは単に家事育児に関わるという狭い問題ではなく、産業システムの構造変化の枠のなかで考え直したほうがいい。

諸橋　男性たちがどう心理的に社会のシステムの中で変わっているかまだよくつかめていない。当の男たちが戸惑っている。今まで女性とマスコミというのは論じやすかったし論じられてきた。しかし、男たちがまだまだ論じられていない。我々はこれから語り、書き、分析していかなければいけない。また、男が変わり得る年令は個人差がある。

D　どんな労働現場でも自分の足元から変えていく、実践していくことが大切。それを上司に理解してもらうことも必要である。

諸橋　鹿嶋さんにうかがいたいが、マスメディアの男たちのモーレツぶりはすごい。それをどうしたら変えられるか、しかし、それでマスメディアの世界は成り立つか。

鹿嶋　一つの事件があれば時間に関係なく関係者を訪ね聞く。それは強制された労働といった感覚はない。しかし、健康だとか家族の立場に立てばそうした生活は正常とは言えないかもしれない。だからといって取材を早々に切り上げてしまっては特ダネ落ちの連続で、その新聞社は凋落の一途をたどり売上も落ちていくだろう。

E　中学生が買うマンガには性の問題が描かれ、おとな向けのマンガが子ども向けの物にまで氾濫しているが。

諸橋　東京都婦人生活文化局が雑誌の内容を分析した報告書『性の商品化に関する研究』を出した。単にセックスやハダカの件数が多いからけしからん、というのではなく、セックスやハダカが、どうモノ化され商品として脱人格化されているかを批判しなければならない。その中で、男の女に対する性支配の仕方の倒錯性が出ていた点が興味深かった。こういった男向けのポルノ文化を実は女も黙認している側面もなきにしもあらず。その時どのように抗議の声をあげてゆくかが問題。

F　女性の裸を送り出しているのは男の子向けのマンガで、男性が描いて

鹿嶋　敬さん

諸橋　泰樹さん

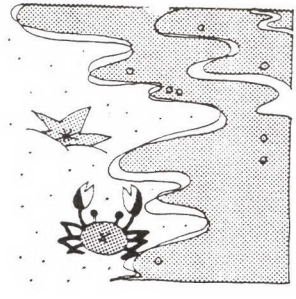
司会
松田　敏子さん

いると思われがちである。一〇年位前の女性雑誌ではレイプされた女の子が、その男の子を好きになるという関係が、女性作家によって描かれている。しかし、最近それが少し明るい方向に変わりつつあるようだ。青年誌に女性作家が台頭している。柴門ふみの「同級生」の中に女性が避妊をボーイフレンドに申し渡すシーンがあったが、それは女性が青年誌をとおして男性にメッセージを送っているのだと思う。少し関係が変わりつつあるのを知ってもらいたい。

諸橋　ポルノ文化は女性の権利を侵害し、屈辱的な立場に置く。女性を抑圧していて「表現の自由」が成り立つはずはない。そのようなことをきちんと議論していかなくてはならない。

G　テレビの職場で働いている。ここは昔から差別意識が高かったが、最近は変わってきて、女にはこんなこと出来ないなどとは言わなくなった。しかし、女性の数はちっとも増えないのに、増やそうという意識は非常に少ない。派手な所に女が出ているので女が少ないことが目立たない。情報機関の中に必ず婦人問題を考える部門を置く、部とか委員会とかあるいは担当者の形でもいいが、そういうものを置くことで少しは変わることもあるだろうと考え、言い続けている。

司会　今回は主に新聞について報告や討論がなされた。しかし参加者からの発言にもあったように、マンガやテレビの差別の問題も考えていく必要がある。今後回を改めて、そのようなマスメディアについての再討論の場を開いてゆかなければならない。



アンケートより

☆現場の話が聞けたことは参考になった。

☆面白かったけど、やはり優等生的な話、また遠い話のような印象がありました。もどかしい感じ。

☆女性の性差別を先鋭的に行っている（記事にも組織的にも）事実に驚かされた。諸橋さんには分析、批判だけではなくマスコミの将来への具体的な展望を出してほしかった。

☆日経しかとっておりませんので、毎日（夕）の婦人のページが今までより楽しみになりました。

☆新聞の中の見出しで、老人老女はやめて欲しいなと思っています。85歳の女性が……でいいのではないでしょうか。

☆もっとフォーラムを多方面にＰＲした方が良いと思います。

☆いつもほどほどの参加人数なので他の講演会などよりためになります。また、講師の方々も職場にきてもらえる…講師さがしもできるので役立てています。

☆参加者が皆様いろいろな分野のスペシャリストのようなので少々気遅れしています。

☆会議中に自動販売機を利用したり、私語を交している女性！の多さにはびっくりしました。

ウイメンズフォーラム開催のあゆみ

ウイメンズフォーラム'８４
ゆれ動く現代　－女たちの明日を考える－

第一回　主婦はもういらない？　－家庭・家族の未来－
'８４．１１．１０（土）　ＰＭ　１：３０～５：００
東京都婦人情報センター
崩れゆく女の足もと　堂本暁子
“家族”から“個人”の誕生へ　ヤンソン由美子
変わる“家族”を支えるもの　暉峻淑子
司会　佐藤禮子

第二回　女性の労働はどう変わる？　－コンピューター化社会の中で－
'８４．１１．１７（土）　ＰＭ　１：３０～５：００
中野区婦人会館
変わりゆく雇用構造と女性　星野進保
ＭＥ革命がもたらすもの　志賀寛子
人間らしい労働と生活を！　柴山恵美子
司会　駒野陽子

第三回　女性解放は何をめざすか？　－平等・変革・解放－
'８４．１１．２４（土）　ＰＭ　１：３０～５：００
中野区婦人会館
性差別意識の現状と変革　田中和子
今、平等を求めて　竹中恵美子
産業社会と女性解放　藤枝澪子
司会　井上輝子

ウイメンズフォーラム'８５
ゆれ動く現代　－女たちの明日を考える－

第一回　いま女の解放とは
'８５．１１．２（土）　ＰＭ　１：３０～５：００
東京都婦人情報センター
男女平等論の系譜　水田珠枝
ウーマン・リブからの出発　江原由美子
司会　井上輝子

第二回　今働き方が変わる　－女そして男も－

'85.11.9（土）　PM 1：30～5：00

東京都婦人情報センター

流動化する雇用構造と就業意識　　亀山直幸

見えない差別の時代へ　　駒野陽子

司会　戸田明子

第三回　家庭・家族のゆくえ

'85.11.16（土）　PM 1：30～5：00

東京都婦人情報センター

新しい家庭のすがたは　　藤井昭三

男性中心家族は崩壊する　　樋口恵子

ウイメンズフォーラム'86

生命科学と女たちの未来　－変わる母性の意味－

第一回　'86.11.1（土）　PM 1：30～5：00

東京都婦人情報センター

ここまできた生命操作　　米本昌平

フェミニズムと人口生殖　　青木やよい

司会　木下ユキエ

第二回　'86.11.8（土）　PM 1：30～5：00

東京都婦人情報センター

産むことをめぐる法律はいま！　　金住典子

医療からみた生殖技術　　丸本百合子

司会　若井文恵

第三回　'86.11.15（土）　PM 1：30～5：00

東京都婦人情報センター

フェミニストたちの選択－フランスの場合　林　瑞枝

生命操作－問われる“女の選択”　　田中喜美子

編集後記

☆このごろ人前で話したり、公的な場に書く事の恐ろしさをチラリチラリと感じている。口から出る一つの言葉や活字となった文章のニュアンスが自分の考えている内容と違った風に受け取られているのでは無いかと思ってしまうからだ。それにつけても世の中には、メディアを通じて言葉が氾濫しているが、送り手は正確に伝わっていると考えているのだろうか。表現する事の難しさをつくづく知らされている私の感想。（松田）

☆いつの間にか事務局に来て、4年間が過ぎました。この間当会も25周年、事務局移転などの変化があり、私自身振り返っている余裕も持てなかったのですが、ずっと遠いことのような気もしています。
私も少し変わってきたようです。
何処に行こうとしているのか今は、霧の中という感。霧が晴れた時、自分は何処に居るのかなどとこの頃は考えています。（佐久間）

☆育児休業補償が法制化されるところにきた。現在17歳の長男が赤ん坊だった頃、育児休業制度を要求して男たちの執行部と対立し、とても消耗したときの疲労感は今もまだ昨日のことのように体にしみついている。
時は流れ続けていたが、その間たゆまず、運動してきた女たちがいてくれた。それにしても、この記録集には時間をかけすぎてしまった。これはただ単に時に追いかけられていた結果だ。申し訳ない！（柴　洋子）

（会場ポスター）宮崎　黎子
（写　真　撮　影）柴　洋子

ウィメンズ・フォーラム '90
日本の男たちはいま
－語ろう・男たちと－

発行日　1991年5月31日
発行所　〒160　東京都渋谷区上原1－47－4
金子ビル302号
日本婦人問題懇話会
（Japan Women´s Forum）
電　　話　03-3466-8252
郵便振替　東京021134番
定　　価　500円（〒210円）

奥むめお主宰の女性運動雑誌の復刻版！
大正12年から昭和16年にいたる運動の記録。

復刻継続刊行中！

婦人運動

全30巻
別冊1

本誌は、大正12年創刊の『職業婦人』を前身とし、後に『婦人と労働』『婦人運動』と改題され、昭和16年まで刊行された女性運動雑誌である。奥むめおの活動は、生活者・働く婦人の立場からの実践の運動であり、現在の女性問題にも多くの示唆を与えている文献である。

- ●推薦＝一番ヶ瀬康子・児玉勝子・松尾尊兊・丸岡秀子
- ●別冊＝解説（鈴木裕子）・総目次・索引
- ●A5・B5判／上製／函入／総10、000頁
- ●揃定価300、000円（全6回配本（'90年6月～'91年12月））

好評増刷出来！

十五年戦争下の女性運動の状況を
鮮やかに映し出す幻の資料

輝ク

全2巻・別冊1

本書は、『女人藝術』廃刊後、長谷川時雨が主宰・組織した「輝く会」の機関誌『輝ク』（全一〇二号／昭和八～一六年）および、『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』の三文集を収録する。女性解放運動と戦争との問題を探求するための貴重な資料である。

- ●推薦＝尾形明子・加納実紀代・佐多稲子・高崎隆治
- ●別冊＝解説（尾形明子）・総目次・索引
- ●B5・A5判／上製／函入／総1、172頁〈復刻版〉
- ●揃定価25、000円

近代女性史・文学史を辿る好資料！

番紅花（さふらん）

全2巻・別冊1

青鞜社を退社した尾竹一枝らが創刊した「純芸術雑誌」。全六号（大正三年三月～八月刊）を収録する。

- ●別冊＝解題（渡辺澄子）・総目次・索引
- ●菊判／函入／総1、408頁〈復刻版〉
- ●揃定価18、000円（合本版）／315、000円（特装版）

婦人文芸

全10巻・別冊1

近代日本女性史に屹立する社会文芸総合雑誌。昭和文学史・女性史研究に不可欠の資料である。

- ●別冊＝解題（黒澤亜里子）・総目次・索引
- ●菊判／上製／函入／総6、362頁〈復刻版〉
- ●揃定価150、000円

女人藝術

総48冊・別冊1・付録1

女性文学・解放思想の源流を辿る昭和初期文芸雑誌。長谷川時雨主宰。昭和三～七年刊の総48冊を完全復刻。

- ●別冊＝解説（紅野敏郎）・総目次・索引
- ●A5判／並製／函入／総9、400頁〈復刻版〉
- ●揃定価150、000円

青鞜（せいとう）

総52冊・別冊1

平塚らいてうが中心となり、近代日本の女性解放の暁を知らしめた雑誌。明治四四年～大正五年刊。

- ●別冊＝解説（井手文子）・総目次・索引
- ●A5判／並製／函入／総8、824頁〈復刻版〉
- ●揃定価120、000円

不二出版
〒113 東京都文京区向丘1－2－12
電話03(3812)4433 振替 東京6-94084

'91年図書目録
内容見本送呈

※表示価格には消費税は含まれていません。